
グラン・エルデの恋歌

青柳朔

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

グラン・エルデの恋歌

【Nコード】

N1741G

【作者名】

青柳朔

【あらすじ】

学園都市、グラン・エルデ。そこは《学園》が一つの町となっている。一般科、魔法科、兵士科——それぞれ学ぶ生徒や教える教師達の小さな恋の物語。 オムニバス形式です。

お転婆姫の遁走曲（1）（前書き）

遁走曲：フーガ【f u g a】

お転婆姫の遁走曲（１）

目の前を散りゆくのは花ではなく深紅の血。

齒がかたかたと鳴った。身体全体震えていて、地面が揺れているんじゃないかと錯覚しそうになる。

ただ一つ分かること。

この人がいなければ、私は死んでいた。

月明かりの下、返り血を浴びたその青年を、幼い私は恐ろしいと思った。

暗闇の中、青年の瞳が鈍く輝く。アメジスト紫水晶のような瞳に、冷たい印象しか抱けなかった。

ただその冷たい輝きを、同時に美しいと、確かにそう思った。

■ ■ ■

「本気ですか、お嬢様」

静かに後ろからついてくるエナがしつこいほど何度も問いかけてくる。何度も同じ答えしか返していないというのに懲りない子だなあ、と苦笑する。

「本気も本気。ここまで来たら後戻りなんて出来ないんだから」

目の前の門は開かれ、その先には一つの都市にも匹敵する《学園》がある。もはや学園という名の都市といっても過言ではない。学校設備の他に生徒の住む寮、そしてたくさんの店が揃った通りまであるのだ。広さはまさに一都市。

学園都市、グラン・エルデ。

学園は、三つに分かれる。

通常教育を学ぶ一般科。魔法学を専門とし、魔導士を育成する魔法科。そして騎士や軍人を育成する兵士科。近年魔物の急増に伴い、魔法科や兵士科の生徒の授業には実戦も含まれるようになってきている。もはや一軍隊といっても過言ではない。

「ですが、抵抗するにしても他に方法があったのではないですか。今からでも遅くありませんから、せめて魔法科に移りませんか」

エナの存在は学園に入学するにあたって、父がつけた条件の一つだった。簡単に言えば見張り役なのだ。

「魔法科って——魔力がないから無理だったんじゃないの。いいわよ。兵士科に通ってたなんて知ったら相手も逃げてくでしょうよ」

「そういうものですかねえ……」

訝しげなエナを睨む。

「父様に何を言われたのか知らないけど、私絶対に結婚しませんからね——！」

ふん、とコーリアは怒りながらすたすたと歩いて行く。

「——なんならエナだけ戻ってもいいけど？」

そう言っただけで振り返ると、捨てられた子犬のような瞳でエナが立ちつくしている。悪いことをしたような気分になって困る。

「ついていきます。私はお嬢様の使用人なので」

数秒後には決意したように駆け寄ってくる。十四歳のエナが兵士科に入学するのは異例らしいが、上手く話がまとめられた。コーリアの父が娘を一人男の群れに放り込むのを阻止したかったのだろう。

——そう、今日から兵士科の一員となるのだ。

「コーリア・クレストです。本日より兵士科一年としてこちらでお世話になります」

案内された部屋に入り笑顔でそう挨拶したコーリアに、視線が集中する。部屋の中には男性しか見当たらない。居心地悪そうにエナが眉を顰める。

「あー……ここは兵士科だが？ 魔法科か一般科と間違えてないか？」

一番手前の——教官の一人だろう、中年の男性が困ったように笑いながらそう問いかけてきた。

「いいえ。兵士科で間違いありません。ご確認していただければ分かるはずですが？」

凜とした態度でコーリアは言う。しかし問いかけてきた男性も、その他の男性も困ったように顔を見合わせるだけだ。

「こうしてちゃんと兵士科の制服も着てるじゃないですか！ どなたか詳しく知っている方はいらっしやらないんですか！？」

問い詰めるようにコーリアが声を荒げた時だった。

「コーリア・クレストか」

すぐ後ろで静かな、そしてはつきりとした青年の声が響く。

振り返ったその先で目にしたのは深い紫の瞳。長めの黒い前髪がその美しい宝石を隠そうとしていた。

「それから、エナ・コルセンだな」

確かめるようにエナに視線が移る。こくりと頷いたのを確認すると、青年はもう一度コーリアと向き合う。

「ジェイド・ヴェスタだ。今日からお前達は俺の隊の一員となる。俺はおまえらの担当教官だ」

「よろしくお願いいたします」

礼儀正しくエナが挨拶をする。

しかしコーリアは紫色の瞳から目が離せなかった。エナと向き合っていたその紫がこちらを向いた途端、火がついたような勢いで腰を曲げる。

「よつよろしくお願ひしますっ！」

勢いの良いその声に紫色の瞳が細められる。その顔をコーリアが見れなかったのは実に惜しかったとしか言いようがない。

事の始まりは数週間前まで遡る。

「——父様、この写真はなに？」

コーリアはにつこりと微笑みながら悠然と座る父に問う。

「良い方だろう。おまえの将来の旦那様だ」

嬉しそうに笑う父の前に、コーリアは、はあ？　と言いたくなつた。口に出してはいないものの、顔はまさしくそんな感じた。この父は頭を打って可笑しくなったのか、それとも寝ぼけているのか。

「この間そちらのご両親と知り合つてなあ。御子息がまたできた人で。ぜひおまえをもらつていただこうとな」

なんて勝手な理由だ。

コーリアは静かに怒りが込み上げてくるのが分かった。近年稀に見る怒りだ。

「今度我が家に招待しようと思う。きちんと挨拶するんだぞ、コーリア」

にこにこと、父はどこまでも機嫌よさそうに話を続ける。コーリアが怒りに震えていることになどまるで気づく様子はない。

「……な、んて」

怒りに堪えられないようにコーリアは低く呟いた。

ん？　と父はコーリアの顔を覗き込むように笑う。

コーリアは勢いよく立ちあがり、そして父を睨みつけて怒鳴った。「父様なんて大嫌い！　こんな家出てってやる！！」

——かくしてコーリアは家から飛び出し、そして捕まり、最終的に出された《学園》行きの条件を父は泣く泣く飲んだというわけだ。

——十年も前の話になる。

コーリアはお転婆で、屋敷から抜け出して広い街で迷子になった。帰り道を探して道へ道へと入れば入るほど迷う。日は暮れ、太陽は姿を消した。

「ここ、どこ……？」

迷ううちに子供のコーリアは町はずれまで来ていた。空に月の姿はない。暗闇がコーリアの不安をさらに掻き立てた。

幼い子供に泣くことを堪えることなどできず、声をあげて泣いていた。

しかしそんなコーリアに救いの手を差し伸べる者はいなかった。その日は新月——ただでさえ夜は魔物が増える。明かりのない夜はなおさらだった。

がさ、とした音に気がついてコーリアは恐る恐るそちらを見た。

——唸る声。獣の匂い。

野犬にしても、狼としても大きすぎる。その大きな牙はコーリアの喉を簡単に引き裂くだろう。

涙で歪んだ視界に、その魔物ははつきりと映る。

低く唸り、その魔物はコーリアめがけて跳躍する。

子供心に、ああ、死ぬんだと思った。

そう諦めた時だった。

夜の闇よりも濃い黒い影がコーリアと魔物の間に立ち塞がる。

それはほんの一瞬だった。光を帯びた剣が魔物を切り裂く。獣の断末魔が響き、コーリアはびく、と震えた。

びしゃ、と頬に血がかかる。生臭いそれに吐き気すら感じた。

ただ呆然とコーリアは座り込んだ。見つめる先にあるのは魔物の死体と、黒い服を着た、黒髪の青年。

「……怪我は、ないか」

青年はコーリアに目を合わせるようにしゃがみ、そっと手が伸ばされた。

そうするつもりだったわけでもなく、反射的に身体がびくりと震えた。

それに気がついた青年が困ったように笑う。紫水晶の瞳が少しだけ悲しそうに揺れていた。

「……………」あ、」

差しのべられた手は下ろされ、コーリアは自分の過ちに気付く。怯えてはいけなかったと、そう思った時には遅かった。

冷たい紫色の瞳が、コーリアの脳裏に焼きついた。

お転婆姫の遁走曲（１）（後書き）

はじめまして。または、いつもありがとうございます。青柳朔と申します。

学園都市グラン・エルデで奏でられるそれぞれの恋物語をどうぞお楽しみください。

あなたのひとときの良いお供となりますように。

お転婆姫の遁走曲（2）

「腕を下げるな。振りが甘い」

到着して数時間もしないうちに、コーリアにとっては鬼のような稽古が続いた。素振り。ひたすらに素振りだ。お転婆だったコーリアにも稽古用の剣は重く、自然と振りは鈍くなる。

「うう……」

コーリアは隣に立つエナを盗み見る。辛そうな表情を浮かべているものの、稽古自体に衰えは見られない。

こんな条件出すんじゃないかと後悔したのはもう何回目だろうか。

そもそも良家の息女は家庭教師を雇い、家で勉強するものだ。学校に通うということ自体が貴族としては非常識にあたる。最近は一軍人の一家ならば子息をグラン・エルデに通わせることはあるようだが、娘の場合はやはり古来奥ゆかしいものが主流のようだ。

まして兵士科はもともと男性の数が圧倒的に多い。そんな中に貴族の娘が紛れ込むなんて前代未聞だろう。魔力がある貴族の娘が魔法科に入る、ということは既にいくつも例があるようだ。それも中流以下の貴族の話で、コーリアの実家のクレスト家は由緒正しき上流貴族だ。

そんな娘を嫁に、なんて考える上流貴族の男はいないだろう——そう計算してコーリアは無理を通して兵士科に入ったのだ。

「——あっ！」

手に力が入らなくなり、剣を落とした。からん、と落ちた音はコーリアが感じていたような重さを感じさせない軽さだ。

「なにしてる、すぐ拾え」

「は、はい」

冷たいジェイドに少し腹を立てながら、コーリアは膝をつく。剣に手をのばしてから、自分の腕が痙攣していることに気付いた。力

が入らない。

「——あれ？」

こんなことは、今まで一度もなかった。腕が疲労で動かなくなるなんて。コーリアの額からは汗が滴り落ち、着ている服は汗を吸ってすっかり湿っている。

「……………」

ジェイドが静かにコーリアを見下ろし、一つ溜息を吐きだすとコーリアの頭にタオルをかける。

「……しばらく休憩だ。コルセン、おまえも少し休め。水分補給もしておけよ」

「はい」

ジェイドの指示に従ってエナは剣を置く。

一度膝をついたコーリアは、疲れているせいか立ち上がることも難しくなっていた。

「おまえも、きちんと汗は拭いておけ。風邪ひくぞ」

控え目なジェイドの優しさにコーリアはむず痒くなる。ここまでしごいた張本人であるというのに、こうした優しさで絆されそうになる。

すたすたと歩き去る教官の背中を見送りながら、コーリアは「くそう」と呟いた。

「なんなのよもう！ あの鬼教官めええっ！ もう立てないいいい」

ぐったりとベットに倒れこんでコーリアは唸る。実家のベットに比べれば固いしごわごわだし寝心地が良いとは決して言えないのだが、疲れた時にはどんなものでも最高級品に等しい。

「お嬢様は体力だけはあるんですけどね」

意外とけろりとした表情でエナが答える。今日の授業——というか稽古は終わり、今はグラン・エルデ内にある女子寮にいる。

「こんなんでもお嬢様だからね、一応。それなりにかよわいの。でもエナ、そのお嬢様ってのはここではやめようよ」

同じ学生なんだしさ、と提案するとエナは困ったように首を傾げる。

「ではなんと呼びすれば？」

「コーリアでいいよ、普通に。敬語もいらない」

そういうわけには、とエナはますます困ったように眉を八の字にする。

しばらく無言で見つめあい——コーリアが先に折れた。

「徐々に、ね。それでいいや。とりあえずお嬢様はやめること」

「はい、コーリア様」

少しだけまだ戸惑ったようにエナが笑う。コーリアは「様もいらないんだけどね」と苦笑しながらエナの髪を撫でた。使用人ではあるが、昔から妹のように可愛がってきたのだ。

グラン・エルデの兵士科では町の警備も担うことになっている。

町と言っても住人のほとんどは学校関係者だ。

コーリアとエナは今ですと昼間の警護を任された。そうなるようにジェイドが調整したのだろう。新人の教育係という名の監視として、問題児認定されているコーリアにはジェイドが、エナにはジェイドの担当している生徒の中でも一番優秀なシオンがついている。必然的に、コーリアがエナと一緒にいる時間は減った。

腰に下がる剣が重いな、と思いながらコーリアはこれを抜くことはないだろうと思う。昼間に現れる魔物は滅多にいないし、町の警護の主力は夜だ。出番があるとすれば、昼間から飲んでいる酔っぱらいが暴れている時くらい。

「昼間だからといって油断するなよ」

心の中を読まれたかのようにジェイドに注意され、コーリアは思わずむっとする。

「油断なんてしてません。筋肉痛で腕は上手く動かないかもしれませんが！」

「あれくらいで筋肉痛になるのか。日頃どれだけ筋肉を使っていないか分かりやすいな」

厭味を厭味で返されてコーリアは言い返せずに言葉に詰まる。

しかし負けじと言葉を探し出して、きっとジェイドを見上げる。

「で、でも私屋敷から脱走するために塀にも木にも登りましたけど！？」

「……おまえな、一応は貴族のお嬢様だろうが……」

呆れたようにジェイドが呟き、それ以上は言っていなかった。コーリアは内心で「勝った」とガッツポーズした。

しばらく無言のままの巡回となり——少しだけ気まずいな、とコーリアが思っていた頃だった。

「おまえ、どうして学園に入ったんだ？」

突然の問いにコーリアはきょとん、とした顔をして、首を傾げる。

「え？ 書類とかに書いてなかったんですか？」

「お嬢様の突然の強い要望、としかなかったな」

わがままとも言つか、とジェイドが呟き、コーリアはここで『わがままなお嬢様』という称号を得ない為にも本当の理由を説明すべきだと考えた。

「横暴な父に対する正当な抗議行動です」

「——へえ？」

面白そうにジェイドが笑う。そういう表情をするとわりと幼い顔なんだな、とコーリアは思った。

「だって、ある日突然この人がおまえの将来の旦那様だぞー、だなんてにこにこ笑って写真を見せてくるんだもの。しかもただそちら両親と気が合って、息子も申し分ない人だからってという理由で！！本気で娘の幸せ考えてる親がすることじゃないでしょう！ 会ったこともない人と、父親が気に入ったからなんてくだらない理由で

嫁げと!？」

思い出すだけで怒りが込み上げてきてコーリアは鬼の形相で力説する。

「……それはお気の毒に」

「でしょう!？」

ジェイドが控えめに同意すると、コーリアは両手で拳を作るほど興奮していた。

「だって、しかも相手というのがあのチェーザー家の三男坊ですよ!？　どこが申し分ない御子息!？　悪い噂しか聞かないじゃないですか!！」

「あー……あいつか。確かに遊び人で有名ではあるなあ」

コーリアの勢いに負けたようにジェイドは引き気味で答える。

「なので、兵士科に入ったんです。剣を振り回す女なんてあつちから丁重にお断りしてくれるでしょうから」

えへんと胸を張る勢いでコーリアは入学理由を言い放つ。

ふう、と冷めたため息が隣から聞こえて、コーリアはジェイドを見上げた。

「……随分とひどい理由だな」

紫色の綺麗な瞳は、コーリアを映してはいなかった。

冷めた響きのその言葉に、コーリアの勢いは急落して、少し悲しくなる。

違うんです、理由はそれだけじゃないんです。

そう紡ぐとしても、唇は上手く動かなかった。

お転婆姫の遁走曲（3）

あの紫の瞳に射抜かれると、声が出なくなる。
冷たい色をしたあの瞳の奥底に、優しさがあることを私は知っているのに。

次の警護では、コーリアにはシオンがついた。代わりにエナにはジェイドがつく形になった。今までと違う対応に、ジェイドは自分に失望したのだろうと、コーリアは結論付けた。

シオンの実力は申し分ないもので、昼間の小さな諍い事もジェイドとそう変わらぬ対処で治めていた。手際が少し悪いのは生徒である分許される範疇だろう。

「……エナは、上手くやってる？ あの子人見知りするから」

町のなかをぶらぶらと歩きながら、コーリアはシオンに問う。最近では寮で過ごす以外、エナと共にいることがなくなった。シオンの方が一日の中ではエナと一番一緒にいるかもしれない。

「わりと、平気かな。最初は少し硬かったけど」

苦笑しながらシオンが答える。コーリアと並んで立つても見上げるほど背の高いシオンと、小柄なエナが並んで歩く姿は微笑ましく、どこかちぐはぐだ。

「剣筋も悪くない。教官も褒めていたくらいだしね」

「エナは頭も良い子なの。もっとちゃんと勉強すれば、将来かなり有望だと思うな」

妹を自慢するようにコーリアが笑う。

そんなコーリアをじっと見つめて、ほんの少し躊躇った後でシオンが口を開く。

「……教官と何かあった？」

凶星だったために反応できなかった。それが答えになってしまい、

シオンは苦笑してコーリアを見る。

「教官、君のことは一から十まで自分が教えるつもりだったみたいだから、変だなとは思ったんだ」

コーリアにつきつきりになっていたのは、コーリアが貴族のお嬢様で、下手に怪我を負わせることも事故に遭わせることも出来なかったからだ。特に深い意味はない。

「……失望、されたであつてるのかな。そもそも期待もされてないんだけどさ。幼稚な入学理由に呆れられたかな」

悲しさを笑顔で誤魔化しながらコーリアが答える。

「ああ、婚約者が気に入らなくてつていう？」

「……エナから聞いたの？」

シオンが知っていたことに驚いて、コーリアは目を丸くする。エナが他人にそこまで話したことに驚きだ。

「まあね。でも、言うほど幼稚かな？　そういう手もあると思うけど。政略結婚なんてもう古い考えだつていうのが今の流れだし。特に自由が制限されているような貴族のお嬢様には有効な手段じゃない？　実際にやる勇者はなかなかいないだろうけどね」

シオンの大人な考え方に、コーリアも少しは救われる。政略結婚はもう古い——そう言われ続けてもなお存在するのは、やはり一番簡単な政略だからなのだろう。そもそも自分の場合は政略にもならないが。

「シオン君は貴族……だっけ？」

「君の家に比べれば侘しい中流だけだね。軍人一家だし」

肩をすくめる仕草がわざとらしく、親しみやすい人柄にコーリアも自然と笑顔になった。

集合時間だね、とシオンが時計を確認する。警護を次の隊に引き継がせる頃だ。皆広場に集まっているだろう。

「まずい。話していて気付かなかった。急ごうか。教官が怖いし」

時間厳守は隊の基本行動だ。一分遅れただけでも雷が落ちる。コーリアもシオンの後を追って走ろうとした、その時だった。

――背筋を走る寒気、獣の息遣い。

それは、幼い頃に体験したそのままだった。背後にそれらを感じた瞬間、ほとんど反射で剣を抜いていた。

「下がって！」

コーリアと同じように剣を抜いたシオンがコーリアの前に立つ。それは昼間ならばほとんど出現しないはずの魔物だった。町の影に隠れるように、こちらを窺っている。

「町はずれで良かった。周囲に人はいないね？」

シオンは魔物から目を離さずにコーリアに問う。コーリアは周囲を見回して人影がないのを確認してから頷いた。

「いいね、君は自分の身を守ることだけを考えてくれればいい。あの程度なら一人で十分だ」

シオンが静かに命じる。実戦経験もなく、またともに剣をふるうことの出来ないコーリアは間違いなく戦力には数えられない。幸いにして魔物は一匹だけで、シオンは仕留められるだけの腕がある。コーリアが頷いたのを確認し、シオンは剣を振るった。

それはコーリアが考えていたのよりもずっと確実に魔物を切り裂き、勝敗はすぐについた。

緊張の糸が解けて、コーリアは肩から力を抜く。そのコーリアの頭上が翳った。

「危ない！」

「――っ！！」

シオンの声に反応して、剣を握りなおす。すぐさまその剣には魔物の牙がぶつかった。

「もう一匹いたのか！」

シオンは最初の一匹にとどめを刺し、コーリアのもとへ走る。しかしコーリアはそれほど長く持たない。もう限界だ。

魔物の牙は今にも剣を砕こうとしているようで、そのままコーリ

アの喉元に噛みついてくるのだらうと——想像するのも恐ろしい。
剣が碎ける前に、押し負ける。

魔物の荒い息使いがすぐ目の前まで迫った時だった。

剣にかかっていた重圧が消えた。

「——え？」

驚き、目を見開く。

目の前の魔物は真つ二つに割れ、コーリアの顔に返り血がかかる。
生臭いその匂いに古い記憶が刺激された。

崩れ落ちていく魔物の残骸の向こうに、アメジスト紫水晶の瞳があった。

「……きょう、かん」

冷えた紫色の瞳が、わずかに揺らぐ。

コーリアは力が抜けて、そのまま地面に座り込んだ。服が魔物の
血で汚れたが、そんなことは気にならなかった。

コーリアのもとまでジェイドが歩み寄り、手が伸ばされる。叱ら
れるだろうか、と一瞬怯えたコーリアの頭を、伸ばされた手は優し
く撫でた。

「よく持ちこたえたな」

予想外の優しい声に、コーリアは泣きそうになった。

温かいぬくもりに、すがりつきたくなるような感情がふきあがる。

「キサラギも、よくやった」

ジェイドはぱつと手を放し、シオンに向かってそう微笑む。いえ、
と謙遜した声がコーリアの耳には遠く聞こえた。

「おい、いつまで座ってる？ 行くぞ」

広場で他の隊員が待っているんだから、と急かす声に、コーリア
はいろんな意味で泣きたくなった。

「腰、抜けたみたいです……」

なんて情けない返事だと恥ずかしくなりながらコーリアは俯く。
せつかく褒めてもらえたのに、なんだこの失態は。

「しょうがない奴だなおまえは……」

はあ、と呆れたため息がなおコーリアの耳に痛い。

ジェイドがつかつかとコーリアのもとまで歩み寄り、そっと手が差し伸べられる。その手を掴もうとしたコーリアの手をすり抜け、ジェイドはコーリアの脇腹に手を差し込んだ。そのままコーリアの身体がふわりと浮く。

「え、ちよつ教官!？」

コーリアはものの見事に荷物のように肩に担がれていた。女子用の隊服(という名の制服)はもちろんスカートだ。コーリアの中が見えるかもしれないという心配は無用だとも言いたげに、大腿のあたりでしっかりとスカートの上から足が押さえられているが――。
「なんですかコレ!？ どういう扱いですか私!？ ここはお姫様だつこが正じゃないんですか!？」

「今さっき魔物に遭遇したっていうのに両手を塞いでいられるわけないだろ」

ぽかぽかと背中を叩いて抗議するコーリアをさらりと流しながらジェイドが答える。しかし町の中でこんな扱いって！

「私これでもやんごとなきお嬢様ですよ!？」

「それがどうした。お嬢様である前に今は俺の使えない部下で出来の悪い教え子だろう」

否定できないだけに悔しい。

結局コーリアは広場まで荷物のように担がれて運ばれ、町の人々にはくすくすと微笑ましそうに笑われる破目になった。

お転婆姫の遁走曲（４）

——嫌われているのか、そうじゃないのか、正直分らない。

はぁ、とため息を吐きだしてコーリアは重くなる足を無理やり前に進めた。昼間の警護で魔物に襲われたのは昨日のこと。昨日はそのまま帰宅を命じられて、半日以上ぶりにあの教官と顔を合わせることになる。

優しく頭を撫でる大きな手と、冷たい声。両方が交互にコーリアを襲う。

昨日「帰れ」と命じられた時にはまた悲しくなるくらい冷たい声だったのに、「頑張った」と撫でてくれる手はあんなにも優しい。

「……コーリア様？ 大丈夫ですか？」

少し先を歩くエナが心配そうに振り返る。大丈夫、とコーリアは少し無理に笑顔を作った。

「今日は、夜間警護なんだよねえ……」

コーリアは空を見上げながら呟く。エナがそうですね、と律儀に答えてくれた。

夜間の警護はコーリアには無関係だと思っていた。どうせ昼間の警護でいっぱいばいなんだから、とそう思われているだろうとあくまで新人扱いには止めるつもりはないらしい。昼間の警護で経験を積みませ、徐々に夜間警護に慣れさせる。

「夜間は四人一組での警護が基本らしいですから、心配いりませんよ」

パートナー制がとられるのは昼間のみだ。夜間は魔物の出没の多いために不測の事態が起きやすい。そういった場合、単独行動を避ける為に四人一組を基本をしている。教官クラスの場合はパートナーや単独での行動も許可されるらしいが、半人前以下のコーリアには関係のない話だ。

「その心配はしてないよ」

「では、ジェイド教官関係ですか」

さらりと踏まれた地雷に、コーリアは転びそうになった。

人見知りするエナだが、ジェイドとシオンには随分と慣れたようだ。そして勘が良いのは昔からだ。

「――べ、別に、そういうのじゃ……どうせ教官は私に呆れてるんだろうし」

「そうでもないと思いますけど」

エナが思いがけずに即答する。

あんまりにもしつかりとした声だったので、コーリアは動揺した。エナは人見知りするけれど、人を観察する目は本物だ。それを知っているから、余計に。

「……どうするんですか？」

控え目な問いに、コーリアは苦笑した。

グラン・エルデに来てから、早くも一か月が経とうとしている。

「――おはようございます」

扉を開けると、ジェイドは机に向ってたくさんの書類と睨み合っていた。

「ああ」

ジェイドはコーリアとエナをちらりとも見ずに短く答える。

「おはよう」

後ろから続けて声がかけられた。振りかえればシオンが笑いながら立っていた。エナがおはようございます、と頭を下げた。

「夜間の警護の組はひとまずおまえらと俺とで四人だ。キサラギ、よろしく頼む」

「了解しました」

そうなると思っていたと言いたげにシオンは笑う。

「……四人のうち二人が新人というのは、普通に考えて厳しいので

はないですか？」

エナが少し躊躇いがちに呟く。抗議、というよりは純粋な疑問のようだ。

「キサラギは魔法も使えるからな。新人の力不足を補うのにちょうど良い」

「きちんと授業を受けたわけじゃないですから、初歩しか使えませんが。どこかの教官が、魔法に関してはまったく教えてくださらないので」

ちらり、とシオンがジェイドを見る。

稀に魔力があっても、兵士科に通う生徒がいる。それがシオンで、そしてそのまま教官になったのがジェイドなのだろう。魔法も使える兵士は需要がある。

「剣の腕がまだの人間が魔法にまで手えつけるんじゃないやねえよ」

はあ、とため息を吐きだしながらジェイドが呟く。少し荒い口調は苛立っているからだろうか。

「手厳しいですね」

苦笑しながらシオンはそのまま部屋を出る。その後ろをエナがとことことついて行った。訓練着に着替えるのだろう。エナは気を利かせたつもりなのかもしれない。

——……教官と二人きりにされてもなあ。

今は、少し気まずいだけだ。

「どうした。おまえも早く着替えて来い」

素っ気ない声に、少しの勇気が簡単に折れそうになった。

それでもこういう人なんだと、そう思うと自然と笑顔になる。優しく、不器用な人だと。

「……………教官」

ジェイドは今もコーリアを見ない。

それでもいい、とそう思った。

「ありがとうございます」

丁寧にお辞儀をすると、ジェイドは目を丸くしてコーリアを見た。

「……なんだ、突然」

眉を寄せて、不審そうに呟かれる。

ふわりと、柔らかく微笑んでコーリアは首を振る。

「いいえ、なんでもないです」

着替えてきますね、と小さく呟いてコーリアは静かに部屋から出た。

——小さな頃、魔物に襲われた。

その時助けてくれた人に、コーリアは怯えた。あんなに恐ろしい魔物を、一瞬にして殺せるその人が、コーリアは怖かった。

差し出された手を、素直に握ることが出来なかった。

あの、紫水晶の瞳が悲しそうに揺れるのを、コーリアは今も覚えている。

片時も、忘れることはなかった。あの一瞬の過ちを、忘れることを自分は許さなかった。

だから、出会ったその時にすぐに分かった。

冷たいあの紫の瞳の、その奥に揺らぐ優しさに。

コーリアは訓練着に袖を通し、きつちりとボタンをしめる。

長い髪を一つにまとめ、訓練用の剣を持つ。最初は重く感じたそれも、今では軽く持てる。素振り続けるのはまだ少し厳しいけれど。

助けてくれた、あの人に。

ただ一言を言うために。

そのために、私はここに来たんです。教官。

それでも、ひどい理由だと言いますか？

お転婆姫の遁走曲（5）

夜の闇の中、コーリアはきよろきよろと周囲を見回す。

お嬢様のコーリアが夜の町を出歩くことがそうあるわけがない。

昼間とは違う表情の夜の町が物珍しかった。

「はぐれるなよ」

そんなコーリアの様子を見て、ジェイドが冷やかに注意する。

コーリアの右隣にはジェイドがいるし、左にはエナがいる。そしてその隣にはシオンが。この状況ではぐれる方が難しい。

大丈夫です、とむっとした顔をそのままにしてコーリアが答える。太陽が西の空に沈んでからだいぶ経つ。夜の町で賑やかなはずの酒場も、学生の町のグラン・エルデには多くない。夜のグラン・エルデはひっそりと静まり返っていた。

肌を撫でる夜風が、不気味だ。

「教官」

短くエナが呟いた。

シオンは既に腰の剣に触れて構えている。

コーリアが二人の視線の先を見れば、暗闇の中で鈍く光る目を見つける。見えるのは二つだけだが、おそらく周囲にまだいるのだろう――魔物が。

ああ、とジェイドが小さく答えた。その手も剣に触れて、すぐに抜けるようにしている。コーリアだけがどうすれば、と困ったようにジェイドを見上げた。

「剣を抜いて、側にいる。離れるなよ」

ジェイドの紫色の瞳が、ちら、とコーリアを見る。コーリアが頷いたのを確認して、わずかに微笑んだ。

「キサラギ、コルセン。用意はいいな」

「はい」

「大丈夫ですよ」

エナは真剣な顔で頷き、シオンは微笑みながら答える。

エナはあんなに小さいのに戦力に数えられているのだ——その事実は少しだけコーリアの胸に突き刺さる。

ぐるる、と低く唸る獣の声。ぞく、と背筋に寒い何かが走る。

その唸り声が合図だったのか——周囲に潜んでいた魔物が一齐に躍り出る。まず最初に魔物を斬り伏せたのはシオンだった。次にエナが斬り、そして止めをシオンが刺した。

「離れるな」

ジェイドが念を押すように呟いた。

その次の瞬間にはジェイドの剣は魔物を斬る。

コーリアは自分に襲いかかってきた魔物に対峙するだけで精一杯だ。斬り伏せるまでは出来ない。一太刀浴びせたところで、ジェイドが止めを刺した。

「キサラギ、時間を稼げ。一気に片付ける」

「どうぞ」

魔物を斬りながら、シオンは微笑む。

その返事を確認したジェイドは剣を握りなおし、そして呪文を紡ぐ。魔法で周囲の魔物を一度に葬るつもりなのだと、その時になつてやっとコーリアは分かった。

呪文を唱えている間にも、コーリアに襲いかかった魔物をジェイドは斬り伏せる。

ジェイドが纏う空気がねっとりとしている。髪の毛がふわりと浮いた。

熱い、と感じる暇もなかった。

「伏せる」

ジェイドが叫ぶ。その声に反応してエナとシオンが伏せた。コーリアはジェイドに引き寄せられて、腕の中に閉じ込められる。

紅い炎が周囲を焼いた。

魔物の断末魔が響き、コーリアは思わず耳を塞いだ。生き物の焼ける匂いに吐き気がする。

——次に目を開けた時には、朝かと思うほどに明るかった。

もはや生き物と思えない物体が炎に焼かれているからだ。しかし魔法で作りに出された炎はすぐにそれらを灰に変えるだろう。

「無事か」

すぐ側で、問いかける声が聞こえた。見上げると驚くほど近くにジェイドの顔があつて、コーリアは硬直した。

「無事です。どちらも怪我ありません」

シオンが剣についた血を振り払いながら、そう答える。エナが顔についた返り血をごしごしと拭いながら近寄ってくる。

「ご無事ですか？」

丸い瞳がコーリアをじつと見てくる。

「だい、じょうぶ」

半ば呆然としてコーリアは答える。肩に置かれたジェイドの手に戸惑う。いつになったら離れていいんだろう。

そう困っている間に、ジェイドの手が離れる。

自然と距離が出来て、コーリアはほっとしたような、少し残念なような、奇妙な気分になった。

その後の警護はこれといって大きな問題もなく、あるとしてもせいぜい一匹二匹を相手にするようなものだ。

次の警護の隊と交代を済ませ、着替える為に一度学園に戻る。

また気を利かせているつもりなのか——エナとシオンは少し遅れがちについてくる。自然と隣を歩くジェイドを意識してしまう。

ちらりと振り返ると、エナが目で「頑張つて」と言っているようだ。

——だから、気を利かせなくていいのに……。

二人にされても会話が生まれるわけではない。

こうして十年前の恩人であるジェイドにどう接していいのかも分からずにいるというのに。

「頑張ったな」

どうしたものかと困っているコーリアの頭を、ジェイドが優しく撫でる。

「……教官って優しいのが優しくないのか、厳しいのが甘いのかよく分からないです」

はつきりしてくれた方が分かりやすくていいのに、とコーリアが呟く。

「……なんだ突然」

「訓練では厳しくせに、こうして警護のときは私に甘いじゃないですか。エナは前線で戦ったのに、私には側にいるとか。冷たい時もあるのに、時々優しいし」

ぶつぶつと呟くと、ジェイドが苦笑する。

「おまえに夜間警護はまだ早い。だが経験を積むことも大切だからな」

その優しい声に、コーリアはますます困惑する。

「——教官は、私のこと嫌いなんじゃないんですか？ いや、呆れてるとか」

素直に問いかけると、ジェイドは「何言ってたおまえ」と乱暴に言い返された。

「嫌いな人間の教官なんて誰がやるか」

即答されて、コーリアは照れた。はつきりと言われると嬉しいけど、どう反応していいものか分からない。ちらりと後ろを見ると、

二人はこちらはどうでもいいのか——仲良く何か話していた。

「それなら、いいんです」

嫌われてないなら。

嫌われていないと分かると、ほんの少し欲が出てきた。

「……私、小さい頃、本当にお転婆で。屋敷から抜け出して、それで町で迷子になったことがあるんです」

へえ、とジェイドは相槌を打つ。

「夜まで迷って、それで、魔物に襲われたんです。そこを助けてくれた人がいて」

ジェイドは覚えていないだろう。人を助けることも、魔物を倒すことも、彼にとっては日常茶飯事のはずだ。

——それでもいい。

「……私、その人みたいに、人を守れる人になりたいです」

あなたのように、優しくて不器用な人に。

「そうか」

ジェイドはそれだけしか言わない。コーリアは微笑みながら、はい、と答える。

「それじゃあ、きっちりしごかないとなあ」

そう呟く声は少しだけ冷たい。だがコーリアの頭を撫でる髪は優しい。

「ご指導、よろしくお願いします」

なんていつても、とコーリアは続けた。

「私は家出中のお嬢様ですから。いろいろ面倒でしょうけどね。不本意な結婚はまっぴらです。どこまでも逃げますよ」

またその話か、とジェイドは笑う。

「覚悟はしてるさ。おまえが駆け込んできた時からな」

コーリアは首を傾げてジェイドを見上げた。駆け込んだ？

「逃げるんじゃない。逃げて来たんだろう？ ——このグラン・エルデに」

ああ、そうか。

私は逃げて来たんだ。

もう逃げる必要はないんだ。

だって、たぶん——。

「大事な生徒だからな、守ってやるよ。巣立つ時まで」

想像していたとおりのジェイドの言葉に、コーリアは嬉しそうに微笑んだ。

お転婆姫の遁走曲（5）（後書き）

これにて『お転婆姫の遁走曲』は終了です。

しかしながらコーリアの恋はまだまだ終わりませんので、またのちほど彼女が主役の物語がお目見えすると思います。

その時はよろしく願いますね。

次の主人公はこちらでも登場していたエナになります。また違った雰囲気をお楽しみいただけたら幸いです。

使用人の聖譚曲（1）（前書き）

聖譚曲：オラトリオ【oratorio】

使用人の聖譚曲（１）

助けて助けて助けて助けて助けて。

——
かみさま。

「立て休むな！ そんなんで戦えりとも思つてんのか！」

最近では珍しくなくなつた教官の罵声が練習場に響く。怒鳴られているのはいつも同じ人物で——それはエナの主人であるコーリアだつた。

苦しげに息をしながら転がつた剣を拾い上げて教官を睨みつける。

「まだまだ！」

お転婆ではあつたが元々はお嬢様のコーリアが、厳しい訓練を耐えられるとは誰も思つていなかった。コーリアの父もどうせすぐに音を上げると考えて学園に入学することを許可したのだろう。

しかしとんだ誤算で——コーリアはまったく堪える様子はない。

どんなにぼろぼろになつても必死に食い下がっていた。

「訓練中によそ見？」

ひやりとした気配に振り替える。剣が首筋をかすめ、反射的に身を引いた。

くす、と笑いながら剣を構えるのはよく訓練相手として組まされるシオン・キサラギだ。兵士科の連中はどれも手加減というものを知らず、ほどほどという言葉も知らない。本気が、そうではないかしかないのだ。結果的に女相手に本気で訓練して叩きのめすか、まるで訓練にならないかのどちらかしかない。シオンは教官以外で唯一まともに訓練できる相手としてエナと組まされることがほとん

どだった。教官はほぼコーリアに付きつきりだ。

「……今は休憩中だったと思うんですが」

隙を見せないように目を合わせたまま呟くと、シオンは剣を下ろしながら「そうだね」と答える。

「不意打ちしてみたんだけど、上手く反応するなあ。お嬢様より才能あるんじゃない？」

エナはコーリアと違って目的があって学園に通っているわけではない。才能があってもなくてもかまわないのだが、とシオンの言葉を聞き流す。

エナは一見すると小柄で、非力に見える。しかし幼い頃から働き手として常に大人一人と同じ働きを求められていたので力はある。小柄なのは成長期に十分な栄養を採り、休息することができなかったからだ。

それをシオンに説明する必要はないと思っているので、詳しいことを知るのはコーリアと——個人情報握る教官だけだろう。

——神様なんていないと、気づいたのはもう随分と昔のことだ。

いつそ殺してくれと願いたくなるほどの劣悪な状況でエナは生きてきた。

物心ついた時には親なんてものはいなかった。自分を守るものは何もなく、毎日倒れそうになるまで働かされ、眠る時はほとんど気を失うかのように固く粗雑なベットに倒れこんだ。

与えられる食事はごくわずかで、成長期の子供には到底足りたものではなかった。

些細な失敗をすれば立てなくなるほどに殴られ、それでも無理やり立たされて働かされた。

その当時エナを支配していたのは『裏』の町の支配者だったらしい。親に愛されて育つはずの期間に、エナは泥にまみれて働かされ

た。

反抗的だったエナは十歳になると人身売買の組織に売られ、そこで奴隷の証だと焼き鑊で右肩を焼かれた。

自分の肉が焼ける匂いに吐き気がした。肩を焼く熱さが心臓を抉るんじゃないかと思うほどに熱く、エナ胃の中のを吐き出す前に気を失った。

その後すぐにエナは売りに出され——買い手が決まる前に、隙を見て抜け出した。手首も足首も鎖に繋がれていたが、売りに出される時だけは歩けるようにある程度余裕がある。しかも売り場は限りなく『表』に近い『裏』だ。

その、限りなく『表』に近い『裏』の町で。

懲りずに脱走を図った十二歳のコーリアに出会ったのだ。

鎖が絡まり、エナが転んだ時に、上流階級の娘であるコーリアはなんの迷いもなく手を差し出した。彼女も父親や従者から逃げている最中らしく、綺麗なドレスはよれよれだった。

「大丈夫？」

エナは力尽きてその差し出された腕の中に倒れた。十歳でも体つきは七、八歳くらいなもので、コーリアはしっかりとエナを受け止めてくれた。

「コーリア！」

彼女を探す父と従者がやって来て、そしてすぐ後でエナを追ってきた男が走ってきた。エナを見つけて早々、蹴ろうとした男の足は、上等な服を着た少女に戸惑い空を蹴る。

「お嬢様、それは俺達のものなんですよ。捕まえてくださって感謝します」

下劣な男の言葉にコーリアは眉を顰めた。コーリアの父はこんな場所から安全な馬車の中へ娘を連れていきたいようだった。

もはや気を失いかけているエナの耳に、コーリアの声がはっきりと響く。

「人はものじゃないわ」

きっぱりと言い返し、そして父を仰ぎ見る。

「お父様。この子を助けて」

——じゃないと、私ここから一步も動かないから。

それは、裕福な子供の、気まぐれに似た我儘だ。
そのたった一言で、エナはコーリアに救われた。

「お嬢様はかなり長期戦になるみたいだね」

コーリアとエナが学園にきて、一ヶ月半が経った。

ちょうど半月前にコーリアとしては一つの山場があったのだが――

――それで音を上げない様子を見ると、学園での生活は長引きそうだ。
「そうですね、最近は訓練も随分頑張っているようですし」

相変わらず昼間の警護でのパートナーはシオンだ。稀に教官と入れ替わる時があるが――そういう時の教官は始終そわそわしているのがエナでも分かるくらいだ。

「魔力があれば魔法科に入れたんだろうけどね。さすがに兵士科は厳しかったんじゃないかなあ」

魔力は純粹に才能の有無で決まる。生まれつき魔力があるかないかが魔法を使えるようになるかならないかとイコールだ。それ故に魔力は『神様からの贈り物』とまで言われている。

「コーリア様には、兵士科でなければいけなかった理由もあるので、エナはコーリアが十年前の恩人を捜していたことを知っている。そしてその恩人が教官であることも。教官本人が覚えているかどうかは怪しいところだが。」

「じゃあ君は？」

突然自分に向けられた問いに、エナはすぐに答えられなかった。

「……どうして、兵士科に入ったの？」

重ねられた問いに、エナはああ、と呟いた。

——答えられないんじゃない。答えは持っていないんだ。

「私に選ぶ権利はありませんよ。私はコーリア様の監視をかねた付添人ですから」

コーリアが兵士科に入るならば兵士科に、魔法科に入るなら魔法科に——ただ後についていくだけだ。

「でも、今みたいな状況じゃ同じ科でも意味はないよ」

監視になってないじゃないか、とシオンが笑う。

それはそうだ。今となつては一日のうちコーリアと一緒にいるのはそう多くない。

「監視は旦那様からの命令ですけど——私は、コーリア様の味方なので」

できるのなら、コーリアには自由でいてほしい。コーリアはエナを暗闇から救ってくれた人だから。たとえそれが幼い少女の気まぐれだったとしても。

「そのお嬢様は、君の自由にしろと言いつつだけだね。無理に兵士科の訓練に耐える必要はないじゃないか。君には魔力があるんだから」

シオンの言葉に、エナは言葉を失った。

規則的に歩を進めていた足がぴたりと止まり、シオンをじつと見つめる。数歩先を歩いていたシオンが足を止め、「どうしたの」と振り返った。

「知って、いたんですか」

問いかけるエナの瞳には違和感を感じるほど何の感情もない。

「……魔力は反応し合うからね。君がその年齢で入学できたのも魔力があつたからだろうし、教官が俺に任せたのも同じ理由だろう」
君と組んでからは随分調子がいい、とシオンは照れたように笑った。

「こちらとしては君がいてくれると嬉しいけどね、これから強くなるだろうし、ただでさえむさくるしい環境だから」

確かに、エナが自ら魔法科へ転科したいと申し出ればコーリアは父を説得してくれるだろう。

エナはゆっくりと歩き出し、シオンの隣に並ぶ。

「——心配いりません。私は魔法科には行きませんから」

どうして、と目線だけでシオンが問いかけてくるのが分かった。

エナはただ前を見つめたまま続けた。

「魔法は、神様からの贈り物なんでしょう？ 私、神様を信じてませんから」

使用人の聖譚曲（1）（後書き）

これからはコーリアの使用人、エナの物語です。

遁走曲よりシリアスな感じですが、よろしければお付き合いくださいませ。

使用人の聖譚曲（２）

いくら助けを求めても。

声が枯れるほどに叫んでも。

神様は弱者を助けてくれない。

手を伸ばしてもその手は届かない。

全知全能の、慈悲深い神様なんてこの世のどこにもいないんだ。

「——神様を、信じてない？」

隣を歩くシオンが静かに問いかけてくる。

エナはシオンを見ることができずに、ただ睨むように前を見ていた。

「信じてません。信じていないものから与えられた力に頼るなんて出来ませんから。私が魔法を使うことはありません」

そもそも使い方を知らないが——知ったとしても、エナが魔法を使うことはないだろう。神様という存在は信じる信じないの範疇を超えて、エナの憎悪の対象になりつつある。

「神様なんて、助けてほしいとどんなに願っても助けてくれないんです。本当に神様がいるなら」

どんどん強くなる語尾に、エナ自身が少し動揺していた。ぎゅ、と強く手を握り締めて唇を噛む。

「——もし本当に神様がいるなら、私のような子供はいるはずないんだから」

たすけて。

そう何度心の中で叫んでも、エナは救われなかった。満足な食事も与えられず、受けられるはずの教育も受けられず、年齢に合わない

いほどやせ細った身体で厳しい労働を強いられる。

食事も教育も、与えてくれたのはコーリアでありコーリアの父だ。一日に三食の食事が与えられることが当たり前だと慣れるまで随分と時間がかかった。やせ細った身体は今でこそ華奢という言葉で誤魔化せる程度になった。

「――君は」

シオンが静かに口を開く。

「集合の時間ですね。行きましょう」

しかしその先の言葉を聞きたくなかったエナはわざと聞こえなかったふりをして、シオンの言葉を遮った。

集合場所には早くも他の隊員が集まっていた。その中にはもちろんコーリアと教官もいる。

「エナ、そっちは何もなかった？」

コーリアが教官の隣に並びながら笑顔で問いかけてくる。

「はい、異常ありません」

つられてエナも微笑む。コーリアに助けられたばかりの頃は、彼女の笑顔が眩しかった。笑い方を、その当時は知らなかった。

「では戻るか。その後は訓練着に着替えて練習場に集合」

明らかにコーリアだけに言ったセリフに、周囲の隊員はくすくすと笑う。

「……教官。私の記憶によると座って勉強した覚えがほとんどないんですが」

コーリアが訓練から逃れようと悪あがきをする。

兵士科といっても学生だ。もちろん訓練の他には一般常識を学ぶための授業もある。重要視されてはいないが。

「書類によるとおまえは二年生レベルまでの教育は受けてるみたいだからな。必要ないだろ」

むしろ訓練こそコーリアに必要なのは、誰の目にも明らかだった。

「キサラギ、おまえは自習室でコルセンと復習」

「はい。了解しました」

エナばかりずるい、とコーリアは頬をふくらませて抗議しているが、それも本気でないことは分かる。

復習というのも名ばかりで、実際はシオンから勉強を教わっている。

十歳でコーリアに助けられるまで勉強なんてしたことなかったエナは、十二歳まで文字もまともに書けなかった。コーリアの実家は簡単な仕事の合間に勉強もできたし、そのために必要な道具も与えられた。だが知識レベルは同い年の十四歳の学生と肩を並べるには程遠い。

シオンも、薄々とエナの生い立ちにも気付き始めているだろう。それでも、自分の口からは言いたくなかった。対等な関係——というのは図々しいかもしれないが、シオンに同情されるのは嫌だった。

「うん、合ってる。飲み込み早いね」

エナのノートを覗き込みながら、シオンが解答と見比べてにっこりと笑う。

勉強を見てもらう分、シオンの自習の時間を削ってしまうことがエナには心苦しい。

「すみません。毎日」

ジェイドもこうしてエナに特別措置をとっているものの、数日で巻き返せるレベルではない。いつまで迷惑をかければいいのかと考えると自然と暗くなってしまう。

「俺は別に構わないよ。一応貴族の端くれだからさ。入学前から教育を受けてる分、授業内容より進んでるしね」

教えることも勉強の一つだしね、と笑うシオンのフォローも上手い。他の教官ではなくシオンにエナを任せたのもジェイドの作戦なのだろうか。

グラン・エルデは奇妙な町だ。平民も貴族も関係なく入学が許される。もちろん授業料の問題はあるが、奨学生制度が整っているの
で志があれば入学することは思いのほかたやすい。兵士科、魔法科
に通い一般警護につくことがあれば、少しだが給金をもらえること
もある。

「今日はこれくらいにしようか。夜間警護もあるしね。身体が鈍^{なま}る
といけなから練習場に行こう」

そう言いながらシオンは教科書をとじて立ち上がる。

今練習場にいるのはコーリアとジェイドだけだろう。他の隊員は
自習しているかサボっているかだ。

「はい」

エナも素直に立ち上がり、ノートを片付ける。

勉強もだが訓練でも他の隊員に劣っていることは事実なのだ。

練習場へ行くと、驚くことにコーリアはジェイドと向かい合って
打ち合っていた。今まで素振りばかりだったことを考えると、コー
リアの進歩が窺える。ジェイドは明らかに手加減しているようだが。
「やあ！」

コーリアが汗を流しながら剣を打つ。ジェイドは汗一つかいてい
なく、それをあしらう様に受ける。

しかしコーリアは負けじと剣を振るう。

甲高い音とともに、コーリアの振るった剣が折れた。もともと古
い練習用の剣だ。ひびでも入っていたのかもしれない。コーリアの
気迫に負けてジェイドが少し力加減を強めたのも要因の一つだろう。
「危ない！」

完全に不意をつかれたのはエナだ。

折れた剣先はエナの右肩に当たる。刃を潰してあるので切れるこ
とはないが、勢いよくぶつかれば打撲にはなる。

「！」

避けるのが間に合わなかった。いや、避けきれなかった。動くことができなかったら頭に直撃していただろう。

「大丈夫か!？」

ジェイドが声をかけながら駆け寄ってくる。コーリアが心配そうにそのあとを走ってきた。

「腕を見せて。手当するから——」

そう言っただけで先にエナに駆け寄ったシオンが、エナの細い右腕を掴む。肩を上げると少し痛んだ。

右肩を襲う痛みが、忘れたい過去を呼び戻した。

肉が焼ける匂い。

気を失うほどの熱さ。

きり、と心臓が痛んだ。

「触らないで!!」

反射的にエナはシオンの手を振り払った。左手で右肩を押さえつけて、エナは蹲る。

手を振り払われたシオンは茫然としてエナを見つめていた。駆け寄ってきたコーリアがエナを気遣うようにそっと左手の上に手を重ねた。

「エナ」

優しい声に涙が出そうになった。温かいぬくもりに痛みが遠のいていく。

「キサラギ、他言無用だ。いいな」

ジェイドがハンカチを裂いて簡易の包帯を作り、エナに側で片膝をついた。念を押すようなジェイドの声に現実引き戻され、シオンは静かに「はい」と答えた。

「聞こえたな、コルセン。……捲^{まく}るぞ」

エナを刺激しないように、そっと右腕に触れ、訓練着を捲^{まく}って患部を診る。訓練着はエナには少し大きく、簡単に右肩が露わになっ

た。

「――」

静かにシオンが息を呑んだのが、見なくても気配で分かった。

右肩に残る醜い私有の証。

趣味の悪い支配者が奴隷に焼きつける消えない痣。

エナは唇を噛みしめて涙を堪えた。ジェイドが腕の腫れ具合を見て、包帯を巻いていく。早く醜い痕を隠してほしいと心の底から思った。

担当教官であるジェイドも、エナを救ったコーリアも、右肩の醜い私有印の存在は知っていた。

たぶん、シオンにこのことを知られなかったのだ。

この醜く爛れた、消し去れない過去を。

使用人の聖譚曲（3）

「痛むようなら戻っていいぞ」

夜間警護の為に制服を着て、剣を腰から下げて集合したエナを一瞥してジェイドが呟く。

「平気です。ちゃんと医務室で診てもらいました。訓練にも支障ありません」

エナはジェイドの気遣いを嬉しく思いながらも、首を横に振る。簡易の手当を受けてすぐに医務室へ向かった。打撲というほどでもなく、念のためにと湿布を貼ってあるが、もうあまり痛まない。

「そうか……無理はするなよ」

ぼん、とエナの頭を軽く叩くように撫で、ジェイドはそれぞれ隊員に指示を与え始める。

無意識に左手で右肩を掴み、エナが俯いていると、その手の上に大きな手が触れた。

「そんなに強く触ったら、怪我に障るよ」

優しい声が耳に届き、エナは顔をあげた。やんわりと諫めたのはやはりシオンだ。

まるで何も気にしていないとでも言いたげな、いつも通りの表情に逆にエナはどう反応していいのか分からなかった。

そして当然のように夜間警護はいつもの四人で組まれ、少しだけ居心地悪そうにエナはシオンの隣を歩いた。

今夜は満月だ。強く地上を照らす月光に怯えて暴れる魔物は少ない。特定の魔物を除けば、だが。満月で狂うような魔物は知能がある分、警備が厳重なグラン・エルデにはあまり出没しない。

「———そういえば、神様は信じてないって言ってたよね？」

隣を歩くシオンがしばらくの沈黙の後でそう口を開いた。

突然何を話したすのだろうと首を傾げながら、エナは「はい」と

即答する。

「君の言う神様ってさ、一神教的な神様だよ。全知全能で、すべてを創造し、そして破壊するような」

「……そう、ですね。このあたりでは一般的に信仰されている『神様』です」

シオンの言いたいことはまだ分からずに、エナは素直に答える。
この国だけでなく周辺の国々も宗教形態は一緒だ。すべての父である神を信仰する。

「俺の家のご先祖様は東の方の人間でね。そちらの方は多神教なんだよね。八百万やゑふまんの神々なんていう言葉もあるくらいだし」

「やお……？」

聞いたことない言葉にエナは首を傾げてシオンを見上げる。

「八百万はっぴゃくまんと書いてやおよろずと読むんだ。つまりそれくらいたくさん神様はいるってことらしいよ。今立っている土にも土の神様がいて、花には花の神様がいてって感じにね。俺としてはそういう考えの方が好きなんだけど」

血筋かな、と笑いながらシオンが続ける。

「重要なのはさ。君は周囲の考えに囚われることなく、君が信じられる神様を見つければいいんじゃないかって、そういうことだと思っただけよ？」

エナはしばらくシオンの言葉を反芻し——そんな考え方もあったんだな、と心のどこかで救われない虚しさが薄らいでいくような気がした。

「魔力は神様がくれた力なんかじゃないよ。神様からの贈り物なんて呼び方は人が神を都合よく解釈しようとしたものに過ぎないからね」

そう言いながら微笑むシオンの横顔が少し黒く見えるのは気のせいではないのだろう。この優等生は猫かぶりが上手い。

「私が、信じられる……」

他のものは何も信じられなくても、それだけは確かだと心の底から信じられる『何か』——それを神と呼べばいいのだろうか。

「気長に探せばいいんじゃない。そろそろ警護にも力入れてもらいたいし」

苦笑しながらさりげなく注意されて、エナははつと顔を上げる。

シオンとの会話に夢中になって、本来の目的をすっかり失念していた。なんて失態だとうとエナは自分を恥じるが、ジェイドもコーリアも注意しなかったあたり大目に見られたようだ。

「す、すみません」

「いいよ。話しかけたのは俺だし。今夜はこれくらい油断しても問題なさそうだし」

シオンのセリフにすかさずジェイドが「あんまり気を抜くなよ」と釘をさしてくる。監督役としては言わなければならないセリフなのだろう。

今夜の警護は町はずれを延々と回って歩く一番危険の多い道順だが、穏やかなものだ。

会話も途切れ、沈黙の中四人が歩いてしばらく経った頃だ。

「あの、血の匂い、しませんか？」

コーリアがおずおずと口を開く。

それを聞いて三人が黙る。風に紛れて、かすかにだが血の匂いがした。

「手負いの魔物が、怪我人か。どちらにせよ探さないとな」

ジェイドがため息をこぼし、二組に別れて搜索と指示を出す。当然のようにジェイドとコーリア、シオンとエナに別れる。

「あまり遠くへ行くな。呼んで応えられる範囲にいる」

どんな予想外の出来事が起きるか分からない以上、すぐに駆け付けられる距離を保つべきだ。シオンとエナは黙って頷き、草むらの方を搜索する。

満月の明かりと手元のランプを頼りに草をかき分ける。

「……………」

すぐに草むらの中から反応があった。

「こっちです！」

エナは声を上げ、警戒しながら声のした方へ歩み寄る。隣のシオンは念の為に腰の剣に触れている。

草が倒れている部分を見つけ、エナがランプで照らした。

倒れているのは、人だった。小さな、エナよりも幼い子供だ。

驚くべきはそれだけではなかった。

「——有翼人^{うよくじん}」

シオンがぼつりと呟く。

血だらけで倒れている十歳くらいの子供は、有翼人と呼ばれる半魔だ。人型の魔物と人間の間に生まれる、人間の亜種。その名の通り有翼人の背中には翼が生えている。

エナは躊躇うことなく片膝をついて子供の様子を見る。着ているものはもうぼろぼろで、服として機能していなかった。靴も履いていない足は傷だらけだ。

そして、何より——

「あなたは、奴隷ね？」

見慣れた刻印が肩にあった。

奴隷の証。所有物であることを物語る痣。

もう立つことも出来ないほどに弱った有翼人の子供は、ただエナの言葉にびくりと震えた。

「——保護します」

駆けつけてきたジエイドにそう言いながら、シオンは自分の上着を脱いで小さな子供をそれで包んだ。

「大丈夫よ。お姉さん達とあったかいところで、傷の手当をしようね」

シオンに抱きかかえられて怯えている子供に、コーリアが優しく

微笑む。

先に行くシオンとコーリアの背中を見つめながら、エナが呟く。

「……私と、同じ刻印でした」

呟いた相手はジェイドだ。

そうか、と短く答えて、ジェイドはそれ以外何も言わない。

「半魔は奴隷市でも高額で取引されます。有翼人のように見目の良いものは愛玩用として、そうでないものは、労働力として。半魔は人間よりも筋力がありますから」

エナはぎゅ、と強く手を握り締めて唇を噛む。

そんなエナの頭をぽんと優しくジェイドが撫でる。

「……分かるな？ 簡単に闇市を潰すことは出来ない。踏み込むにはそれ相応の理由が必要だ。あの子供一人では理由にはならない」

——どんな国にも、必ず闇はある。

それを潰すことは容易ではない。そんなことが分からないほど、エナも子供ではない。光があれば闇も存在する。それは道理だ。

「……………分かってます」

簡単に潰せるものなら、エナのような子供はいない。あんな風に、子供が傷つけられることもない。

分かっている、ひどくやるせなかった。

使用人の聖譚曲（４）

どうにもできない。

それが分かっていたはずなのに、どうして自分はこんな場所にいるんだろう。

傷ついた有翼人の子供を保護した翌日は、学校は休みだった。

一晩中もやもやとした言いようのない何かを抱えて、エナは一つ決意した。

別にあの子供は関係ない、私は自分の恨みを晴らすだけ——そんな言い訳を何度も繰り返し返しながら、まだ日も昇らぬ早朝にエナはグラン・エルデから出た。

今日は学生は休みだ。出かける人も多いだろうし、町の外に行く人間もいるだろう。さらにエナは『兵士科』という肩書きがある分、怪しまれることはなかった。

存外簡単に町を出て、エナは通りすがりの荷馬車に同乗させてもらった。近くに大きな町がある。エナが以前にいた町とは名も場所も違うが——人身売買の組織が範囲を広めたのか、根を張る町を変えたのかのどちらかだろう。

右肩を強く握ると、古い傷が疼くようだ。

この痛みを消し去らない限り、たぶん自分は前に行けない。

町の『裏』には容易に入れた。

長い間過ごしたその雰囲気は身体が覚えている。その空気が濃い方へ濃い方へと進んでいけばいいだけだ。

「おい、そこのおまえ。何してやがる？」

突然背後から声をかけられた。

怯えていることを悟られないように振り返ると、見るからにガラの悪い男が立っていた。身なりがそれなりに整っているのを確認し、エナはきつと下から睨みつける。

「——あなたたち、有翼人の子供を探しているんじゃない？」

男の目の色が明らかに変わった。

掴んだ——エナは内心でそう確信を得ながら続ける。

「私、その子の居場所知ってるんだけど？」

エナが今着ているのは制服でも訓練着でもない。服装からエナがどこの人間かは分からないだろう。

「てめえ、どこの——」

「教えてほしいんなら、それ相応の対応をするべきじゃない？——番偉い人に会わせて」

そう言いながら手が無意識に腰にあるはずのものを探す。少女が剣を持っていれば警戒されるだろうと、寮に置いてきたことを思い出した。今エナを守るものは服の中に忍ばせた短剣だけだ。

男はエナを一瞥し、頷く。

「いいだろう。ついてこい」

——諸悪の根源を断つ。

それだけで解決されるような問題ではないことくらい分かっているけれど。

「教官っ！」

休みだというのに、コーリアは朝早く制服を着て学園にいるジェイドのもとに駆け込んできた。偶然にもその場にはシオンもいる。ちょうどエナの授業の進行具合を話していたところだった。

「どうした」

短く問うと、コーリアが慌てた様子で一気に話し始める。

「朝！ 目が覚めたらエナがいなかったんです！ 制服も剣もその

ままで——あの子が私に黙っていなくなるなんてありえないのにつ
！」

がた、と立ち上がったのはシオンだ。

ジェイドがシオンの腕を掴み、静かに「落ち着け」と呟く。

コーリアはお嬢様として実家にいたころは寝坊の常習犯だったが

——最近では自主練の為に自ら早起きしている。休日だが今日もその癖で起きてしまったのだ。

「おまえは、いなくなったことに気付かなかったんだな？」

「わ、わかんない——どうしよう。どこに行ったんだらう。まさか、あの子」

混乱して泣き始めるコーリアを見てジェイドは一度ため息を吐きだす。落ち着けと言うべきなのは一人ではなかったらしい。

「キサラギ。隊を集める。隣町に行く」

「え、あ、——教官？」

はつきりとした命にシオンがわずかに動揺した。

「人身販売の組織のリストを上げる。保護した有翼人から話を聞いて組織を特定。俺たちは先に出立するから伝令を魔法科から借りてこい。他は全部俺について来い」

ジェイドはてきぱきと隊員に指示を下し、シオンとコーリアを振り返る。

「呆けてる暇も泣いてる暇もないぞ。コルセンが心配ならとっとと準備しろ」

ジェイドはそう言いながら少しだけ優しくコーリアの頭を撫でる。シオンは敵わないなあ、と苦笑するしかない。

ついてこい——と案内された先には忘れもしない男がいた。

「有翼人の居場所を知ってるって？ 本当だろうなあ？」

問いかけながら笑うその男の顔に、エナは吐き気がした。肩に焼き鏝を押しつけるその瞬間と同じ顔だった。

「ん？ それよりおまえどこかで——」

エナの顔をまじまじと見て、憎い男が呟く。覚えていたのか、とエナは自嘲気味に笑った。

「居場所は知ってるよ。まあ——教えるつもりはないけど！」
エナは懷から短剣を取り出し、男の懷まで駆ける。上手くこの男を殺せたとしても、たぶんエナは助からない。それでも良かった。コーリアやその父に恩返しが十分に出来ていないのは心残りだが、コーリアを守ってくれる人が見つかったのは幸いだった。

「——んぐうつ！！」

男を刺し殺す前に——エナは護衛の男に殴られ、押さえつけられた。床に顔をこすりつけながら、エナは男を睨みつけた。

「赤い髪に、琥珀色の目……ああ、珍しい色だったから覚えてる。おまえ、俺が売った奴だな？」

押さえつけられたままのエナを見下し、汚い掌でエナの髪を撫でる。

「単身乗り込んで、どうにかなるとでも思ったのか？ 存外に馬鹿だな。この俺に刃を向けたのは万死に値するが——昔より身綺麗だし、その目なんかは希少な色だしなあ。買い手はごろごろいるだろう」

娼館か、どこかの爺の閨か。どちらが良い？——そんな風に笑いながら問いかけてくる。

何度、こうやって絶望しただろう。

神様なんていない。

こんな男が大きな顔で生きていられる世の中はなんて汚らしくて、愚かしいのだろう。

『——君が信じられる神様を見つければいいんじゃないかって、そういうことだと思つよ？』

——嗚呼。

どうして、こんな時に思い出してしまうんだろう。

助けて。

そんな願いはいつも届かないと知っているのに。

エナの琥珀色の瞳から、ぽたりと雫が落ちた。

「――たすけて」

それは他の誰でもない、ただ一人に向けられた願い。

叶うことはないと分かっているのに、自分ではどうしようもない時に助けを求めてしまう。

『――今行くから、待ってて』

「……………え？」

空耳だろうか。

エナには確かに、シオンの声が聞こえた。

耳で感知するようなものではなかった気もする。頭の中に響くようなその声の余韻に浸っているうちに――轟音が響いた。

「なんだ!？」

男たちがざわめく。

砂煙があがり、騒ぐ周囲は咳きこんでいるのが大半だ。

不意にエナの上から重みが消えた。先ほどまでエナを押さえつけていた男が吹き飛んだのだ。

「男が女の子の上に乗るもんじゃないと思うけど？」

いるはずのないその人に、エナは驚きで声が出なかった。

灰色の髪が砂煙の中姿を現した。剣を片手に持つその人は、エナのよく知った人だ。

「――大丈夫？」

微笑みながら手を差し伸べるシオンに、エナは安堵すると同時にため息が零れた。

いつもは届かなかったはずの願いは、届いた。

自然と零れる涙を、エナは拭わなかった。差し出された手にそつと自分の手を重ね、微笑む。

「見つけ、ました」

たぶん、何があっても、私はこの人を信じられる。

シオンはエナの頬を伝う涙を優しく拭いながら、「うん？」と微笑む。

「見つけました。あなたが——私の神様です」

使用人の聖譚曲（5）

「馬鹿かおまえら！ 呆けるな！」

ジェイドの叱りつける声にはつとし、エナとシオンはすばやく立ち上がった。

「教官、今それ言うのはちょっと無粋ですよ」

「もう少し待っててもいいじゃないっすかー」

くすくすと笑う隊員達は余裕の表情で剣を振るっていた。周囲が見えてなかったな、と反省するエナの胸に、細身の剣が差し出される。隣で苦笑するシオンだった。

「……さっきのセリフの意味、あとで聞かせて」

見上げた時にはシオンの顔はよく見えなかった。ただ照れているのだろうということだけは分かって、エナは微笑む。

周囲には隊員が剣を振るい、組織の人間達を次々に捕えていく。

先ほどまで落ち着いて会話できたのはたぶん気のせいではなく、隊員達の気遣いだったようだ。

エナは隊員達の中でも一番小柄なその身体で、自分の倍はありそうな男を斬り倒す。致命傷にはならない場所を狙う余裕すらあった。その様子にジェイドが気づいて、わずかに微笑む。

そう長くない時間で、部屋の中にいた男たちは全員縛りあげられた。増援がない様子からして、建物にいる他の人間ももう捕らえたのだろう。

ただ一人——諸悪の根源たる男が腰が抜けたように、剣を握るエナを見ていた。

「た、たすけてくれ。俺は何も悪いことは——！」

エナは静かに近寄り、剣を握りなおす。

底冷えしそうなほどに冷たい琥珀色の瞳が殺したいほど憎い男を見つめた。

「……人は、ものじゃない。たとえ半魔であろうと、有翼人であろうと、孤児であろうと、おまえの所有物になるために生まれてきたんじゃない！」

エナは叫びながら剣を振り上げた。

ぎゃああ、という情けない悲鳴が耳を貫き、吐き気さえ覚える。

振り上げた剣は、男の右肩を貫通した。

「……焼き鏝こてを押し付けられるよりはましでしょう」

エナはそう低く呟いて、剣をおさめた。他の隊員がすばやく男を縛りあげ、鎮圧は完了した。

振り返ったエナの目には明らかに怒っているジェイドの姿がある。叱られるだろうと億劫になりながら、ジェイドの目の前まで静かに歩み寄った。

「……申し訳ありませんでした」

深く頭を下げて謝罪する。個人の行動で、結局隊を動かさせてしまった。

ふう、とため息が頭上から聞こえ、エナは顔を上げたくとも上げるタイミングを逃してしまった。

「——このじゃじゃ馬が」

そう言うと、ジェイドはエナの頭を優しく撫で——ぐしゃぐしゃと髪を乱した。

「!？」

予想外の行動にエナは顔を上げると、ジェイドはびっくりするほど穏やかに微笑んでいた。

「次があつたら、単独で行動するな。誰でもいいから隊員に一言言え。一人で動かれた後に隊が出動するよりはマシだ」

「……もうしません」

ひかえめにエナが主張すると、ジェイドは「そうか」とあっさりと返した。

「——その、コーリア様は」

まさか現場まで来ているのだろうか、と不安になりジェイドに問いかける。

「学園に残してきた。一緒に行くってさんざんわめかれて隊員二名が負傷する大惨事だ。まったく、うちの女連中は手に負えん」

こんな危険な場所にコーリアが来なかったことにほっとし、エナは微笑む。

「ありがとうございます」

エナはジェイドを見上げて微笑む。彼の左頬にひっかき傷があるのは、コーリアが暴れたのと無関係ではないのだろう。

学園まではシオンが乗ってきた馬と一緒に乗せられることになった。他の隊員達もみんな同じように馬に乗っている。遠出の場合は馬車を使うのだが、緊急の場合はいつも馬を使うらしい。

乗馬も覚える必要があるのか、とエナは今後の授業についてどうするかと考え込む。

そのおかげで、シオンとエナの乗る馬だけが少し隊から遅れていることに気付かなかった。

「——あの、さ」

躊躇うようにシオンが口を開く。

気がつけば隊のほとんどは随分と前に行っている。そのことを指摘すると、大丈夫と返ってくる。

「……なにか？」

上手く言い出せずにいるシオンを訝しげに見上げてエナが問う。見上げてエナからはシオンの顔が見えない。

「私の、神様っていうのはどういう意味？」

ちらりと振り返りながらシオンがエナを見た。

『見つけました——あなたが、私の神様です』

確かにエナはそう言った。

思い出したように「ああ」と呟いてエナが続ける。

「以前に、信じられる神様を見つければいいって、そう言うって下さいましたよね？」

「うん。言っただけど？」

それって関係あるの？ とシオンが首を傾げる。

「つまり神様とは、絶対的に信じられる存在のことを指しても間違いではないですよね？」

「え、まあ——間違いではないんじゃないかな。信仰心に近い意味合いだとしたら」

「だから、あなたは私の神様です」

突然結びつけられた結論に、シオンは思いっきり動揺した。

「ちょ、ちよつと待って！ もっとかみ砕いて分かりやすく言つて！ 君は頭の良い子だろう！？」

どうして？ とエナは首を傾げながらシオンの言う『分かりやすく噛み砕いて』説明する。

「ですから、私はたぶんキサラギさんのことを絶対に信じきれないと思います。だって今まで神様も叶えてくれなかった私の願いを叶えてくれたんですから。何があっても、信じてます」

だから、神様なんです。とエナが締めくくると、シオンは深くため息を吐きだした。

「それってさあ、普通もつと違う結論にいくんじゃないかなー……」

あはは、と乾いた笑みを浮かべてシオンは小さく呟く。上手く聞き取れなくてエナが聞き返すが、「なんでもない」と言われてしまった。

もしかして——

「……………嫌、ですか？」

突然神様扱いなんてしたから、困らせてしまったのだろうか？ とエナは不安げに問う。

それは反則だろう、と思いながらシオンは首を横に振る。

「まあ、別に嫌な気分にはならないよ……好意は好意だしね」

「良かった」

本当に安堵したようなエナの声に、シオンはますます困り果てる。気長にいくか、と呟くと、エナは首を傾げて「何がですか？」と問いかけてくる。

無邪気なのか、天然なのか——本当に始末に負えない女の子だな。そう思いながらシオンは苦笑する。

「……そういえば、突入前にキサラギさんの声が聞こえたような気がしたんですけど」

あれは空耳なんだろうか？ とエナに問いかけられて、シオンが説明を始めた。

「あれも、魔法の一つだよ。テレパシーみたいなものかな。魔力の波長を合わせて、会話するといつかね。助けてって、聞こえた気がしたからさ」

励ますつもりでね、とシオンは笑う。

それが本当に、エナにとってどれだけ嬉しかったか、本人以外は知りようもない。

「……ちよつと離れすぎちゃったかな。飛ばすからちゃんと捕まってる」

ふう、とため息を零しながらシオンは速度を上げた。言われたとおりエナはしっかりとシオンの背中にしがみつく。

広いその背中に、とても安心できた。

とりあえず——学園に帰ったら。

勉強以外に、乗馬も教わることにしよう。

使用人の聖譚曲（5）（後書き）

これにてエナの物語は終了です！

思いのほかエナが天然のキャラになってしまいました（笑）

ご感想、ご意見、誤字脱字の報告などありましたらどうぞ一言でも
お願いします。

女剣士の舞曲（1）（前書き）

舞曲【menuett】

女剣士の舞曲（１）

訓練場では明るい声が響いていた。

普段男ばかりの兵士科に、最近では女子生徒の姿がちらほらと伺えるようになった。

その女子生徒は剣を懸命に振りながら、教官であるジェイドと剣を交えている。随分成長したな、とナデイルは微笑んだ。

訓練場の隅では小柄な女子生徒が簡単な魔法の練習をしているようだ。その点ジェイドはさっぱり教えないから、優等生のシオンに教わっているようだ。

「あのお嬢様は、貴女が引き受けると思っていたんですけどね」

訓練を眺めているナデイルの背後から低い声が響く。

「……そのつもりだったが、ジェイドが横からかつさらっていったんだよ」

ナデイルは振り返ることなく答える。声の主はちゃっかりナデイルの隣に並んで同じように訓練場を見下ろした。

「普通に考えれば兵士科唯一の女性教官の貴女に預けますからね。

まあ、彼でも問題ないでしょう。事実きちんと育っている」

「そうだな、結果としては良かったんだろう」

私は魔法を使えないしな、とナデイルは呟いて踵を返す。

「ちよつと待つてください」

背を向けたナデイルの腕を大きな腕がするりと掴む。体育会系ではないくせに、この男は意外と力がある。

「……何の用だこのヤブ医者め」

「失敬な。私はヤブじゃありませんし、医者ではなく保健医です。

そして名前はアオイ・キサラギですよ。お忘れですかナデイル・エイジ教官？」

にっこりと微笑みながら最大の厭味を言うのはいつものことだ。

眉間に皺を寄せてナデイルはアオイの腕を振り払った。

「貴様の名前を口にしたいだけだこの変態」

「変態でもありません。失礼ですね。とりあえず貴女は保健室へ連れて行きますよ」

抵抗する暇もなしにアオイはナデイルを抱え上げた。世に言うお姫様だつこ状態にナデイルの顔は真っ赤に染まった。

「な、何しやがる！ やめろ降ろせ！」

「はいはい、文句はあとでまとめて聞きます。足を痛めたのはいつですか？ すぐに保健室に来てくださいよ」

「貴様に会いたくないから行かないんだろうが！ 怪我するとどこからか嗅ぎつけてきやがって！」

「いやあゝ誰かさんのおかげで勘が鋭くなりましてねえ」

ナデイルを軽々と持ち上げたままアオイはすたすたと保健室へと歩いて行く。すれ違う生徒がくすくすと笑いながら挨拶して駆けて行く。

「……もはや名物扱いですね」

ふう、とアオイがため息を吐きながら嘆く。嘆きたいのはこつちだとナデイルはアオイを睨みつけた。

「嫌なら降ろせ」

「いえいえ。光荣ですとも。舞姫と謳われるナデイル教官と噂になるなんて」

ナデイルの剣筋はまるで剣舞のようだ、と誰かが言いだしてからというもの『学園』でナデイルは舞姫と言われるようになってしまった。本人はやめてくれと騒いだがそれも無意味だったので達観している。

「こつちはまつぴらだ」

そう言いながらもナデイルが抵抗を止めたのは抵抗しても疲れただけだということを今までの経験から嫌というほど理解しているからだ。

ほどなく保健室にたどり着き、ナディルは丁重に椅子に座らされた。

「それほど腫れていないみたいですけどね。きちんと手当てしないとあとで響きますよ？ 教官なんですからそのあたりはしっかりしてください」

ナディルの足首を診ながらアオイが呟く。

「普通の手当てで十分ですかね」

そう言いながらアオイはナディルの足に湿布を貼り、器用に包帯を巻いていく。アオイが保健医として働いているのには当然わけがある。習得の難しい治癒魔法が使えるからだ。

「どうですか？」

アオイが微笑みながら問い、ナディルは爪先でとんとんと床を叩き、立ち上がってみる。

「——悪くない」

「そうですか、大丈夫ですか」

くすくすと笑い、アオイは後片付けを始める。

む、としながらナディルは立ち上がり、保健室から何も言わずに立ち去る。

長い白銀の髪が消えていくのをアオイは目を細めて見つめていた。

「ああ、ちゃんと手当てしてきたのか」

訓練場で一休みしているジェイドはナデイルの足をみて一言呟く。
少し遠くに噂のお嬢様がぐったりと座り込んでいた。どうやら相当
しぼったらしい。

「変態に見つかつてな」

「素直に行けばあんな恥もかかないだろう」

「あいつに近寄りたくないんだから仕方ない」

「そのくせ不器用だから自分では手当てが出来ないだろ」

ふう、と呆れたようにジェイドがため息を吐いた。ナデイルは剣
を振るうことに関しては得意中の得意だが——包帯を巻くなんてこ
とは大の苦手だ。ごちゃごちゃになって結局誰かに救いを求める破
目になる。

「——それで、どんな調子だ？」

ナデイルは漬れているコーリアと、さらに遠くでシオンと共に魔
法の練習をしているエナを見てジェイドに問う。

「まあまあ、だな。コルセンは上達すれば使えるだろうが——あれ
はよくて後方支援だろう。危なつかしくて見てられん」

「お嬢様育ちにしては頑張つてると思うが」

むす、とした顔でジェイドが「それは認めるが」と低く呟いた。

その表情にナデイルも思わず笑う。

「もともと向きじゃないんだ。フロローする身にもなってほしいね」
それはそうだろうな、とナデイルは納得する。だからこそ自分の
ところで保護しようと思ったのだ。

「フロローは教官としての務めだ。おまえが担当すると決めたのな
ら責任を持て」

おまえが受け持つと言って強引に持つていったんだろう。そう言
うと不貞腐れながらもジェイドは異論を唱える様子はない。ふ、と
ナデイルは頬を緩ませる。

「……きちんと育ててやれ。おまえを慕ってここに来たんだろう」
ぼん、と肩を叩きナデイルはその場を去った。

女剣士の舞曲（1）（後書き）

今度は少し趣向を変えた主人公でお届けします。

純情女性教官と腹黒な保健医のちょっぴり大人な恋です。

あなたの読書のよきお供となれますように。

女剣士の舞曲（2）

——声は何度でも蘇る。

自分の声だ。

『何故もつと早く来なかったんだ！ 早く来てくれれば間に合ったかもしれないのに！』

周囲には自分の生徒達のすすり泣く声だけが響いている。一人の生徒は固く目を閉ざしたまま地面に横たわっている。

学校といえど兵士科は——命の危険と隣り合わせの任務もある。もちろんその中で命を落とす生徒も少なくはない。

その時死んだ生徒は、今までの自分が教官として働いてきて初めて失った生徒だ。そして今のところはまだ、二人目はいない。

分かっていた。

たとえ優秀な保健医であるアオイがもつと早く駆けつけてきても——間に合わなかっただろう。それは目に見えて明らかな致命傷だった。

それでも八つ当たりせずにはいられなかった。
アオイの胸倉を掴んで何度も何度も胸を叩いた。

『——すまない』

彼は、それしか言ってくれなかった。

ベツトの上でナデイルは痛む頭を押さえながら起き上った。

何度も繰り返し見る悪夢のような、過去の夢。

「……最悪だ」

あの時のことを、久し振りに見た。

アオイの手当てを受けた翌日はいつもそうだ。だからあの男とは関わりたくない。

泣き顔を見られ——その上に八つ当たりまでしたのだ。それをそのまま素直に受け止められてしまった。

丁寧に手当てされた足はまったく痛まない。もとより大した怪我ではなかったのだ。

そつと足首を撫で——ため息を零した後でナデイルは立ち上がった。

「こんにちは、教官殿。足の具合はどうですか？」

「……すこぶる好調だ。不本意なことに」

生徒の訓練を見ていたらナデイルの背後からにこやかにアオイが話しかけてきた。うんざりとした表情でナデイルは答える。

ぴたりと寄り添うように隣に立つアオイから離れるように、一歩横にずれる。その反応に気付きながらもアオイは苦笑するだけで距離を縮めることはなかった。

そのあたりに大人の余裕さを感じて少し憎たらしくなった。

ナデイルはため息を吐き出しながらアオイをさらに距離をとった。

「——あんまり、近寄るな」

おかげで今夜もまた夢を見る。

憎みたいわけではないのに、憎しみを生み出そうとする過去の夢を繰り返し繰り返し。そのたびに己の罪を見せつけられているかのようで。

「……それは、無理な相談ですね」

苦笑しながらアオイはそっとナディルへと手を伸ばす。

大きな手は頬に振れそうな距離まで伸びて——長い白銀の髪をすくいあげた。すくいあげた一房の髪に口づけて、ナディルを見つめて微笑む。

その目に射抜かれてナディルは声を失う。

「好きな女性の傍にいたいと思うのはいけないことですか？」

「——っ！」

髪に触れるアオイの手を振り払い、真っ赤に染まった顔を隠すようにナディルは走り去った。その後ろ姿を見ながらアオイはくすくすと笑い、追いかけることはなかった。

ふざけるなふざけるなふざけるなふざけるなふざけるなっ！！

「ふざけるなあのクソ変態があ——！！」

恥ずかしさのあまりに走って逃げたが、走り続けていると羞恥よりも怒りの方が勝った。

今すぐ戻って斬ってやろうかと考えて、思わず硬直する。触れられた髪だけが熱いような気がしてナディルはまた顔を赤く染めた。いつもそうだ。

過去を理由に八つ当たりするのも、逆恨みするのも、それを引きずり続けるのも嫌なのに——だから距離を置いて離れようとするのに、あいつはいつも人が作る壁を越えて、時にはぶち壊して内側ま

でやってくる。

そのくせにいつもとらえどころのない笑顔でこちらを真っ直ぐに見詰めてくるなんて――。

「くそっ！」

苛立ちをそのまま壁にぶつける。殴りつけた壁には傷一つないのに、殴った自分の拳は痛む。

「……ナデイル教官？」

驚きと戸惑いの混じった声が聞こえてナデイルは顔を上げた。火照る頬はまだ赤いだろうかなんて少し気にしながら顔を引き締める。

「悪い、なんでも――」

ない、と言おうとした先にいたのはシオン・キサラギだった。その隣にはナデイルの声に驚いたのか、隠れるようにエナ・コルセンがいる。

「どうかしました？ 教官のクラスは訓練中では――」

生徒のわりにはしつかりとしているシオンに、思わず自分の余裕の無さが浮き彫りになったようで恥ずかしくなる。

「ああ、少しな。おまえ達は」

「彼女と一緒に自習していたところです。うちのクラスは教官の訓練を受けなきゃいけないのは俺達とお嬢様くらいですから。けっこう野放しで」

言われてみればシオンやエナの手には教科書があった。今頃はジエイドがコーリアをしごいている最中なのだろう。

「……もしかして、また叔父が何かしました？」

窺うようなシオンの声にナデイルはセリフを喉に詰まらせた。姓から察することが出来るように、シオンとアオイは血縁者だ。東方の血が混じった一族だから外見だけでも充分に血縁関係が明らかなのだが。

「い、いや。別に――」

誤魔化そうとしたが、失敗した。これでは何かあったと言っているようなものだ。

「……すみません。癖のある人で」

シオンが苦笑しながら頭を下げる。特に非があるわけでもないのに生徒に頭を下げられるのは戸惑うだけだ。

「いや、おまえが謝ることでは――!」

「駄目な人ですねえ、近寄られたくないなら怪我しないでくださいよ」

くすくすと笑いながら聞こえる声と、ぞわりと背筋を這う気配にナデイルは硬直する。

振り返ることもできずに冷や汗を流していると、声の主は遠慮なくつかつかと歩み寄ってナデイルの手を持ち上げる。先ほど壁を殴った手からは少しだけ血が滲んでいた。

「まったく、女性なんですから少しは気を使ってくださいよ」

「これくらい怪我のうちに入るか! 放せ!」

「保健医が怪我を目の前にして何もせず退散すると思いますか?」

「は、な、せ!」

無駄と分かりつつもついさっきのやり取りの後では触られることも恥ずかしくてナデイルは全力で抵抗する。

「……あんまり押しすぎると嫌われますよ」

ふう、と呆れたようにシオンがやんわりと釘をさし「失礼します」と一言だけ残し、エナもぺこりと頭を下げて立ち去って行く。

ナデイルは内心でこいつと二人きりにするなと叫びながら、無駄な自尊心が原因で叫ぶことも出来ずに、小さくなっていく二人の背中を見送った。

女剣士の舞曲（3）

「……そこまで嫌われるようなことをした覚えはないんですけどねえ」

腕がぴんと張るくらいのぎりぎりまでアオイを距離をとるナディールを見て、アオイはため息まじりに呟く。

「別に嫌ってるわけではない、が」

少し寂しそうな響きの声に思わず優しい顔を見せそうになってナディールは口ごもる。嫌いというより——苦手なだけ、だと思う。

「なら良かった。それじゃあまた保健室に行きましょうか。商売道具に傷をつけてどうするんですか」

わずかに血が滲む手はアオイに掴まれたままだ。放せば逃げると思われているのだらう。そしてそれは外れていないから、ナディールも先ほどから隙を窺っているのだ。

「これくらい舐めておけば治る。わざわざ消毒するほどじゃない」だから放せと長身のアオイを下から睨みつけると、ふむ、と少し何かを考えたような様子の後で、アオイはナディールの手を持ち上げた。何事かとナディールが不審げに見つめていると、静止する暇もなくアオイは傷口を舐めた。

「——つつつつつ！——」

舌の這う感触に毛が逆立ち、ナディールは渾身の力をこめて手を振り払った。

「何しやる！」

「舐めておけば治ると貴女が言ったから舐めたんですが？」

「誰が貴様にそんなこと頼んだ！」

ナディールは顔を真っ赤にしながら噛みつくが、アオイは可笑しそうに笑うばかりだ。その余裕な表情がなおナディールの機嫌を損ねる。

「……駄目ですよ」

眉間に皺を寄せて睨みつけるナディールに、アオイは柔らかく微笑

みかける。その穏やかな顔に動揺して、ナデイルは思わず追撃の言葉を飲み込んだ。

「女の人なんですから、あんまり傷痕を残しちゃ」

また頬が熱くなるのが分かった。

仕事柄、女扱い自体慣れていない。さきほどからのアオイの行動に惑わされてばかりだというのに、その上さらに攻撃してくるのかとナデイルは内心で毒づいた。

「……………戻る」

これ以上傍にいたら気がおかしくなりそうだ。

ナデイルはアオイを直視することが出来ず、目をそらしたまま踵を返した。相変わらずアオイはその後を追ってこない。追いかけてくるわりに、ナデイルが逃げると追ってこないのだ。

「傷、一応消毒はしてくださいね」

去っていくナデイルの背中に優しさの混じった声が投げかけられる。

振り返ろうかと少し迷った挙句、ナデイルはそのまま返事もせずに訓練場へと戻った。

「教官」

ぼんやりと訓練に励む生徒達を見ると、下の方から声がかけられた。声が聞こえた方を見れば、救急箱を手を持ったエナが立っていた。女性にしては長身のナデイルと並ぶとエナは随分と小さい。「手当てして来いとジェイド教官から申しつけられたのですが」

どこから聞きつけたのだろうとジェイドの方を見ると、当の本人は尻もちをついたコリアに手を差し出しているところだった。おそらくシオンがジェイドに話したんだらうなと苦笑する。

「悪いな、頼む」

そう言って手を出すとエナの小さな手が消毒液を持って器用に手

当てを始める。

こんなにも小柄な少女が剣を振るうのか、とそう思うと苦しくなった。いつかこの少女が大怪我を負うこともあるだろうし、またあやうって頑張っているコーリアが怪我することもありえるだろう。死ぬことだってないわけではない。

「……おまえは、どうしてここにいる？」

気がつけばナディルは小さく呟いていた。それは問いという響きはなく、純粹な呟きだった。

傷口を綺麗な布で拭ったエナはきょとんとした顔をしてナディルを見ていた。何故かしまったと思ってナディル自身も動揺する。

「いや、答えなくて——」

いい、と言おうとすると、エナは小さく声を発した。

「……………最初は」

道具を救急箱の中にしまいながらエナはさらに続ける。声は聞き逃しそうになるほど小さいが、その中には芯の強さを感じさせるものがあつた。

「コーリア様に、ついて来ただけでした。私には自分の意思というものがなく、コーリア様が、旦那様の決定がすべてだったので」

エナは息を切らしながらも訓練を続けるコーリアを見て微笑んだ。その横顔がナディルには少し眩しい。

「今は、少しだけ道が見えてきた気がします。不幸な子供を助けることができるように、強くなりたいと、そう思います」

ナディルは手を伸ばしエナの赤い髪を優しく撫でる。

——守ろう。

こうして輝ける未来を持つ生徒達を。
それが自分の役目なのだ。

もう二度と、過ちは繰り返したくない。後悔を重ねたくない。

「――教官？」

エナがどうしたものかと困惑して問うてくる。その様子が小動物のようで可愛らしく、ナデイルはくすくすと笑いながら心が和むような気がした。

訓練に戻っていいぞ、とそう言おうとした時だった。

けたたましい警戒音が訓練場に響き渡った。すぐさま魔道士による放送が流れた。

『グラン・エルデ北東部にて複数の魔物目撃情報有り。訓練生はただちに増援へ』

内容を把握した後のナデイルの対応は早かった。すぐさま自分の担当生徒を集合させて声を張り上げる。

「聞いたな！？ 四人一組になって現地へ向かう！ ハンス、レニの班は街に待機、巡回し市民を安全地帯へ誘導、その他は組で行動の上散りながら現地へ向かい、道すがら見つけた奴らは全部叩き斬れ！」

凜としたその姿に生徒達は背筋を伸ばして返事をする。

「無理はするな、敵わない場合は後退して他の組と合流しろ、どうせそう離れていない」

ジェイドが追加してそう指示を出し、ちらりとコーリアを見る。

その先に出てくる言葉を予想していたのだろう、コーリアはジェイドを睨みながら先手を打つ。

「残りませんよ。私も行きます」

「……息が上がってるだろう」

「誰のせいですか！ 問題ありません！」

先ほどまでジェイドに絞られていたコーリアの体力に余裕はないだが本人は一步も引くつもりはないらしく、ジェイドもあまり特別な扱いをするわけにもいかない。

「――私も加わろう。新人二人を抱えてることを考えれば教官二人がついても不思議はない」

ナデルが剣を片手にそう申し出る。ジェイドは少しだけ考え込んだ後で、眉間に皺を寄せながら「仕方ない」と呟いた。

普段の警護とは違って突発的なものである分、備えは万全にしていって損はない。魔物が複数確認されているという情報がある以上、群れている可能性もないわけではない。

——後悔はもうしない。

この身を盾にしても守るべきものを守ろう。

これ以上、あの男に寄りかかりたくはないから。

女剣士の舞曲（4）

住民の避難が完了した街は昼間だというのに不気味な静けさに包まれている。

結局ナデイルはジェイドの率いるコーリア、エナ、シオンと共に巡回しつつ北東部へと向かっていた。

最初は息が上がっているコーリアの為に急ぎつつも早歩きで、そしてコーリアが回復してからは全員小走りで街を駆け抜けている。通常ならありえない数の魔物と何度も遭遇した。確かに今の季節は魔物にとつての繁殖期で気が荒だっているものが多い。しかしどうやったらこんな大量の魔物が侵入できるというのか。

ここは学園都市、グラン・エルデ。一つの都市として確立しているのはその警護の厳重性も理由の一つだ。もちろん隙間をぬって侵入する魔物も少なくはないが、市民全員が避難するほどの事態は数えるほども起きたためしはない。

「教官っ！」

コーリアが前方を見て叫ぶ。

隣に並ぶジェイドにも確認出来ているはずだ。街の北東部には森に繋がる大きな門がある。森にはもちろん魔物も多く、その侵入を防ぐ為の門でもあった。

「そついうことか！」

ジェイドが舌打ちしながら剣を抜く。

大きく頑丈なはずの門は、一部が大きく崩れていた。その大きさは軽く人二人が通り抜けられるほどで——それほどの大きさが開いていれば大抵の魔物が侵入できる。

「下がれコーリアっ！ キサラギ、前方へ出る！」

コーリアは少し不服そうにしつつ剣を抜きながら下がる。そのコーリアを守るようにエナが隣に並んだ。

反応の遅れたコーリアに代わりエナが素早く剣で魔物を斬り伏せた。その反射神経の良さにナデイルは感心しつつ、片手で魔物を斬る。

門の近くには何人が倒れている人が見える。おそらく魔物が最初に侵入してきた波に飲まれたのだろう。早く手当てしなければ手遅れになるかもしれない。

しかしながら門の周囲にはまだたくさんの魔物が徘徊していた。新しくやってきた客人に牙を向けている。門を修復しない限り魔物は増える一方だろう。

「ジェイド、おまえも下がって魔法の準備をしろ。私が出る」
剣を構えジェイドを押しつける。ここで一度周囲の魔物を一掃するにはそれが一番楽だ。

もう一本の剣をすらりと抜きながらナデイルは前に出る。

「——頼む」

ジェイドは頷きながら下がり、コーリアとエナの前で低く唱え始めた。

エナがその姿を見てじつと何かを考え込んでいるようだ。剣を握り、魔物を斬り伏せながらきゅ、と唇を引き結ぶ。

「キサラギさん」

そのエナがとん、と一歩下がり、シオンと背中合わせに立ちながら何かを囁いた。シオンが少し驚いた表情になって——そして笑う。
「いいね、面白い」

多数の魔物を相手にしながらも笑う余裕があるのだから、あの保健医との血縁関係を納得させられる。

ナデイルはそうやって生徒を見守る余裕を見せながら双剣を振るう。

その姿はまさに優雅に舞っているようだ。息切れもしていないナデイルに何匹もの魔物が同時に襲いかかっても、ふわりと円を描く

ようにナデイルは全てを斬り伏せた。

「下がれ！」

ジェイドの声に反応して、前線に出ていた三人が下がる。一瞬にして周囲は青い炎に包まれて魔物達が断末魔を上げる。その声が耳に残って仕方ない。

魔法というものは剣を振るうよりも実にあっけないものだ。時間も労力も魔法の方がずっと楽だけれど、どこか物足りないような――それでいてどこかほっとしているような感覚にナデイルは苦笑した。

ジェイドも人間を避けて魔法を使っているのだから大したものだな、と感心しながらナデイルは倒れている人間の救助に向かった。

「エイジ教官、気をつけてください」

エナの声に反応して、ナデイルは顔を上げる。

壊れた門の近くにいたからだろうかと考え――注意そのものが別ものなのだと気づかされた。

空から巨大な岩が降ってくる。

それは何かに操られているように、ふわりと壊れた門の穴を塞いだ。しかしそれでも大人三人分以上あるのではないかというほどの大岩だ。地面に着いた瞬間にどすんと重たい音が聞こえ、地面は軽く揺れた。

何が起きたのだろうとコーリアがぼかんとした顔で岩を見つめている。ジェイドは剣をしまいながらすたとエナとシオンのもとへと近づいてきた。

「上手くいったね」

「はい！」

シオンとエナが二人で魔法を使い、岩を移動させたのだろう。二人は顔を見合せながら満足そうに笑った。

ジェイドはそのエナの頭をくしゃくしゃと撫で、そしてシオンを

見る。

「よくやった」

端的ではあるがジエイドとしては最高の褒め言葉だった。そのことを二人もよく分かっているのだらう、一度見つめあって、そして子供のように無邪気に笑い合った。

そんな微笑ましい光景を見つめながらナデイルは目を細めた。足元に蹲る怪我人の様子を見ながらほっと安堵した。大怪我ではあるものの、命に別条はないようだ。怪我の痛みで気絶しているのだらう。

——良かった。

今回は間に合った。手遅れにならなかった。

同じ過ちを繰り返さずに済んだ。

そう安堵したその時だった。

「エイジ教官!!」

コーリアの悲鳴のような声が聞こえた。

身を潜めていた魔物がナデイルの頭上に影を作る。

気配に気づいて剣を抜いた時にはわずかに遅かった。肩を鋭い痛みが襲う。痛みで顔を歪めながら牙を剥いて来た魔物を斬り払う。

「教官! 大丈夫ですか!？」

コーリアが慌てた様子で駆けつけて来たが、その前にナデイルの肩を掴む大きな手があった。

「――曲がりなりにも、女性なんですから怪我はしないようにと言っているはずですが？」

ひんやりとした声に、ナデイルは目を見開いた。

いつの間にかこんなところまで来たのだろう、呆れたような、困ったような顔でナデイルを見下ろしているアオイはそつと傷口を確認する。

「今度は、間に合いましたね」

ナデイルは一瞬だけ顔を曇らせて、以前がいつだったのかは聞かなかった。ほつと心の底から安堵したようなアオイの声に返す言葉はなかった。

そんなナデイルの様子に気づいているのだろう、アオイは苦笑する。

「……身体に残ったらどうするつもりです？」

そつと治癒魔法をナデイルに使いながらアオイがぽつりと呟いた。
「そしたら貴様がやぶ医者なだけだろう」

「責任とってお嫁にもらってもいいですよ？」

厭味を言つたつもりだったのに、アオイには何の効果もなかったらしい。ナデイルはその言葉を確認するように頭の中で反復し、顔に血が上ってくるのが分かった。

「っ！ 大きなお世話だ！！」

不意打ちのような言葉にナデイルは乱暴にアオイの腕を振り払った。

「私を診る暇があるならその怪我人を手当てしろ！！ こんなかすり傷だ！」

真っ赤に染まった顔を見られるのが嫌でナデイルはそのままアオイに背を向ける。

「まあ、かまいませんけどね。じっくり落としますから」
半分くらいは落ちているみたいですね？ 耳元をかすめた甘い
声に、ナデイルの顔はますます赤みをしました。

半分どころか——もう完全に落ちているのかもしれない。

けれど甘えることが出来ないから、今はまだ。

意地っ張りなふりをして彼の言葉を聞こえなかったことにしよう。

君に捧げる鎮魂歌（前書き）

鎮魂歌【requiem】

君に捧げる鎮魂歌

手の中には、一通の手紙がぼつりと寂しそうにある。

飾り気のないシンプルな封筒に綴られた言葉を、再び直視するのが怖くて、それでも捨てることはできなくて、ただじっとその手紙を見つめて呟いた。

「——— 本当に、馬鹿だな、おまえは」

自分の声は思った以上に震えていた。

溢れ出そうになる涙を堪えて、もう一度呟いた。

「馬鹿だよ、本当に。…… おまえも、私も」

こんなになるまで気づかなかったなんて、どこまで私は愚かだったんだろう。

後悔しても過去には戻れない。堪えていた涙はぱたりと白い封筒の上に落ちた。これ以上涙で濡らさないように、胸に抑えつけて嗚咽を零す。

ねえ、行き場のない想いはどうすればいい？

重たい魔道書を抱えながら廊下を歩いていると、騒がしい連中と

すれ違う。兵士科の生徒だ。男子学生が多いせいか騒々しいし、荒っぽい連中が多い。魔法科の生徒——特に女子は嫌って避けて通ることが多い。

しかし私は避けることはなかった。こんな奴らの為に遠回りするなんて馬鹿馬鹿しい。

「サリエ」

すれ違いざまに名前を呼ばれて、眉間に皺を寄せながら振り返る。顔を上げていなかったし、集団の中の一人だったから気づかなかった。

「珍しいなあ、こんなところで会うなんて。相変わらず重たそうな本なんか持って」

そう言って集団から抜けて笑うのは、兵士科のアルスだ。少し前に訓練で知り合ったのだが、やけに絡んでくる。

「あんたが持つてる剣に比べれば軽いもんよ」

アルスは兵士科の典型という感じの——荒っぽく体格のいい青年で、話によると農家の三男坊らしい。短く切られた髪は亜麻色で、瞳は薄い茶だ。よく見るよくある容姿。

「そりやそうだろうよ。おまえの細腕じゃあ剣なんて持てねえよ」

あはは、と豪快に笑いながら剣を肩にかける。

分厚い本一冊で腕が痛くなる私とは明らかに身体の作りが違う。

「……次、訓練なんじゃないの？ エイジ教官は厳しい人だって聞くけど？」

アルスの訓練教官は確か唯一の女性教官のエイジ教官のはず。厳しくて手を抜かない人だと聞いたことを思い出す。

「やべ、忘れてた。おまえはこれから自習？」

「そうよ。魔術式組み立て直すの」

そか、と呟きながらアルスは踵を返す。

「じゃあ、またな」

——どうして『また』なのよ。

別に私とあんたは友達じゃないでしょう。ただ少しだけ交流があ

るだけの、それだけの存在でしょう。

そう心の中で言い聞かせながらもいつも彼を無視できない自分に首を傾げていた。

『なあ、あの時援護してきたのって、おまえ？』

アルスに初めて話しかけられた時のセリフは、こんなだったと思う。

魔法科と兵士科が共にグラン・エルデの外の森へ行き——そこで魔物を狩っていく。単純な訓練であって、同時に身の危険が迫る。だから班はサポートに回る魔法科と前線に出る兵士科でバランスよく組まれていた。

『そうだけど、なにか？』

邪魔をするなどでも言いたいのだろうかと私はアルスを下から睨みつけた。あの時私が魔法で援護しなければ間違いなく怪我をしていただろう。そう確信していたから引くつもりはなかった。同じ魔法科の友人は私の袖を引きながら『やめておけ』と主張している。

『すげえな。助かったよ。あん時はけっこうヤバかった』

しかし予想とは違って、アルスは人懐こそうに笑いながらお礼を言ってきた。魔物の血で汚れて、本来なら近寄りたくもないような状況なのに、私はそれを嫌と感じなかった。

『呪文って、なんか歌みたいだよな。綺麗だからちよつと気がそれてた』

ダメだよなあ、と笑いながらそんな風に人のことを褒めるものだから、どう反応したらいいのか分からなかった。

ただまっすぐに人を見るアルスが羨ましかった。

アルスは人から好かれる存在だった。裏表がなくて、人懐っこくて——典型的な好青年といった感じた。

友達だって多かった。

ねえ、なのにどうして？

私なんかこんなものを遺して逝くの？

■

■

■

自習室にいた私を、兵士科の制服に身を包んだ青年が訪ねてきた。アルスと比べると華奢な印象があるな、と思った。普通の青年と変わらないような体格の彼でも剣を振るうのだろうかと見上げながら思う。灰色の髪は青年の印象をなお柔らかいものになっている。

「君が、サリエ・サーベスト？」

暗い表情で問われる。

「そうだけど？」

どうしたというの、と問い返した。兵士科の人間と関わるような理由なんて——アルスくらいしか思いつかない。そして原因が彼だとしたら、アルスが直接来るはずだろう。

「アルスのことは知ってるよね？」

質問はさらりと流され、青年は一つの封筒を差し出してきた。無骨な字で『サリエ・サーベストへ』と書かれていた。見なれない字に首を傾げる。

「彼から、君へ。……遺書だよ」

そうか、やはりこの人がやって来た原因はアルスカ、と思いながら手紙を受け取る。直接渡せばいいのと思って、青年の後半のセ

リフがやつと脳に届いた。

——遺書。

「——え……？」

何言ってるの、と呟いていた。

だって、昨日もアルスに会った。またね、って彼は言ったのに。

「……今日、兵士科の訓練で事故があつてね。森へ行った訓練兵の手には負えない数の魔物に襲われたらしい。教官も付き添っていたけど……重軽傷者は十名近く、死者が一人。……それがアルスだった」

兵士科、魔法科に問わず、訓練中はいつも死の危険性が付きまとう。それでもグラン・エルデでそこまでの犠牲者が出ることは珍しい。

「兵士科は遺書を残すように言われてるんだ。アルスの遺書の中に、家族あての他に君へ向けたのがあった。だから届けにきたんだ」

読むも読まないも、君の自由だよ。硬い表情で青年はそう続ける。そのまま何も言わずに扉へと戻り——「ああ」と青年は思い出したように振り返った。

「……あと、君へ伝言。たぶん、君に言っただと思う」

振り返った彼は苦しげな顔だった。無理やりに微笑みを作りながら、こちらを見ている。

「『もう一度、おまえの歌が聞きたかった』……意識がなくなる直前に、そう言ってたって」

誰からの、誰への伝言なのかなんて分かり切っていた。私にだけは分かる言葉だった。だってアルスは私が呪文を唱えた時「歌みただ」と、そう言ったのだから。

青年はそう言つと、今度こそ部屋から出て行った。

灰色の髪が扉の向こうに消えていき、呆然としたままそれを見送った。

嘘だろうと頭の中で何度も何度も繰り返して——恐る恐る手紙を開けた。

——こんな、はずじゃなかったんだけだな。

手紙はその一文から始まっていた。

死人からこんな手紙を受け取るのは、重たいだろう？

だからこんな手紙をおまえが読む状況にならなければいいんだけど。

サリエ。

俺はおまえが好きだよ。

本当にごめん。

俺が死んでからこんな想いを渡されても、サリエには辛いだけだろうけど。

伝えきれないままじゃ、たぶん死んでも死に切れない。

手紙は読んだら捨ててくれていい。出来たら覚えていてほしいけど、俺のことを忘れてくれてもいい。

おまえが幸せであるように俺は祈るから。

——それだけだ。

たった、それだけだ。

なのに涙が溢れて止まらなかった。

馬鹿だよ、おまえは。

馬鹿だったんだよ、私も。

今更気づいても遅いの。おまえはもうこの世にいないのに。

——アルス。

私も、おまえが好きだよ。

気づかなかったけど、好きだったんだよ。

兵士科では簡易の葬儀が行われていた。

遺体はこれから家族のもとへと送られ、大半の生徒達はここで別れを告げる。親しい友人や教官は本来の葬儀に参加することになっている。

友人の多かったアルスの死を悼む人は多かった。

すすり泣く声が響き、いつもは騒々しい兵士科の連中も今はしみりしている。

棺に入ったアルスは見えない。棺を運び、アルスが学園の外へと運び出されそうになっている時だった。

「……………歌？」

生徒の誰かが呟いた。

小さな声だが、どこからか歌のようなものが聞こえた。

「いや、違う」

歌が聞こえ始めてから、空からひらひらと何かが舞い落ちて来た。花びらにも似た、雪の結晶にも似た、白く光る小さな欠片。淡く光を放ちながら地面に触れて消えていく。

「……………呪文だ」

一人がそう呟き、校舎に目を向ける。魔法科の教室の、ベランダに一つの人影を見つける。

ねえ、せめて。

おまえの願いは叶えるから。

どうか。

——どうか、
安らかな眠りを。

君に捧げる鎮魂歌（後書き）

今回は一話完結です。

ご察しの方もいるでしょうが、アルスは「女騎士の舞曲」のナディルが亡くした生徒です。

作中に出てくる灰色の髪の生徒はシオンです。一応アルスはシオンの友人だったんですよ。

ラブコメなのりの多い話でしたがたまには趣向を変えて。

読了ありがとうございます。

ご感想などいただけると励みになります！

狼少年と円舞曲を（1）（前書き）

【waltz】円舞曲

狼少年と円舞曲を（１）

学園都市グラン・エルデには様々な人が集う。

優秀な魔法の才能のある人も、剣術に優れた人も、最近ではお嬢様が剣を手に戦っていたりするらしい。

けどそんな個性溢れる若者の中で、私の個性といえば『普通』であること。

普通でいい。普通が一番。

魔法の才能なんていらないし、まして剣を振り回そうなんてとても思わない。

ごく普通に学校に通って、ごく普通に卒業する。どこかで素敵な人と出会って、そして恋に落ちて、ごく普通に恋愛して、結婚して、何人か子供に恵まれたりして年を重ねていく……将来はそんな当たり前の感じでいい。

それほど『普通』を求める私が魔法科や兵士科に通うわけがない。一般教養を学ぶ学生らしい一般科に在籍している。

グラン・エルデでは魔法科や兵士科ばかりが目につくけれど——貴族や市民に関係なく知識を与える一般科も、それなりに評価はされている。

平凡で満ち足りた生活を送っていた——はずなのに。

「どおしてこんな場所で迷子になるのよおおおお」

グラン・エルデの外の森で、私の叫びは響いた。

明後日までの長期休暇、久しぶりに実家に帰っていただけだ。そして帰って来たただけだ。それなのに！

「馬車代をケチって歩くって選択をしたのが悪かったの！？ だってもったいないし！ 学校まで一本道だし日が高いうちは魔物だつて出ないだろうし！ ああもうやだ日が暮れちゃうううう！」

太陽は無情にも西の空へ沈もうとしてる。夜になれば森には魔物が溢れるだろう。兵士科の巡回があるにしろ、身の危険が迫っていることは間違いない。

風に吹かれて木々がざわめく音すら、背筋を凍らせる。

「あー！ あー！ あー！ 平気平気平気！ 誰もこんな美味しくなさそうな子食べないって！ ねえ！？」

自分で言うのも悲しいけど、胸はないし背は低いし出るとこ出ていない体型の私はあんまり美味しくはないと思うんだ！ というかそうやって自分を妖魔化さないと怖くて歩けない！

だって足は震えているし、今にも泣きそうになってる。

太陽は容赦なく姿を消そうとしているし、吹きつける風は徐々に夜の気配を孕んでいて冷たくなってきている。

グラン・エルデまで遠くないはずなんだから、問題ない。全然まったく問題ないはず。

森の中は夕暮れでも薄暗い。灯りもない状態で歩くのがそろそろ厳しくなってきた。どうしようという問いが頭の中で何度も何度も繰り返されている。

草をかき分けて歩いていると、前方に光る目を見つける。

「きゃあ！」

思わず悲鳴を上げると、ニャーという鳴き声が聞こえて光る目の主がひょっこりと姿を現す。

私の足にじゃれついてくるのは、まだ小さな猫だ。

「……なによ、子猫じゃない。驚かさないでよ……」

思わず腰が抜けてその場に座り込む。驚いた分それだけ安堵感が強い。

そして油断していたせいだろう。目の前に一人の少年が不機嫌そうにこちらを睨みつけていたことに気づかなかった。

「うるせえんだよ、おかげで目が覚めただろうが」

低い声に、びくつ、と身体が震える。

子猫がいた方を見れば、そこにはシルバークレイの髪の少年がいる。睨みつけてくる少年の瞳は、まるで……まるで、猫のように瞳孔が細い。

一目で普通の人間じゃないなんてことは分かる。だって耳は少しとんがってるし、犬歯がやたらと鋭い。

——……半獣人だ。

ふぁ、とあくびしている少年のその鋭い牙に釘つけになりながら、私はもう駄目だと思った。

食べられるか、殺されるか、たぶんどっちかだ。だって見るからに凶暴そうなもの。そして私はその彼の機嫌を損ねたみたい。

ああ、お父さん、お母さん、うるさい弟連中。どうぞ先立つ不孝をお許しください。平凡に普通に生きて行こうとしたのに死因は明らかに普通じゃないと思います。ベットの中で孫達に囲まれて眠るように死ぬのが夢だったのに——！！

きつく目を閉じて最期の瞬間を待つ。痛くないのがいいなあ、できれば一瞬でぱくつと食べてくれたりするといいのになあ！

がさ、と少年が立ち上がる音がして、無意識に身体が震えた。

「邪魔なんだけど」

「え？」

おそろおそろ目を開けると、目の前に少年が立っていて私を見下ろしていた。こうして近づいてみるとあまり背は高くないんだな、と気づく。もしかしてもしかしたら私でも勝てるんじゃないかな。「え、えーと、その、私食べられたり殺されたりしないのかな？」

一縷の希望を胸に呟くと、少年は物凄く鋭い目で睨みつけてきた。

「ああっ？」

「きゃあああああごめんなさいすみません許してください——！」

それが迫力あったもんだから私は思わず悲鳴を上げて頭を抱える。「だからうつせえつつてんだろぅが！ あんまり騒ぐと魔物に気づかれんぞ！」

「きゃああそれはイヤ——！」

錯乱状態の私は少年に何を言われても叫んでいた。チツと苛立つように少年が舌打ちして、私の口を塞ぐ。

「ぶぐううううう！」

「だ・ま・れ！ 耳も聞こえないのかこのブス」

「ぶふう（ブス）！？」

確かに美人じゃないけどそれは失礼でしょう！？

「……そのカツコ、学園の生徒だろ？ なんでこんなところに居やがるんだよ。ぼさつとしてると魔物の餌食になるだろ」

だから道に迷ったんですってば、と口を塞がれているから訴えることもできない。目で主張していると、少年は「……騒ぐなよ？」と念を押して手を放してくれた。

「……道に迷って、学園までの行き方が分からなくなったの」

口に出してみると見事に子どもっぽい理由に恥ずかしくなった。

「馬鹿じゃねえの？」

「馬鹿ですみませんね！」

少年の直球なセリフに私は思わず怒鳴ると、「騒ぐな！」とまた手で口を塞がれる。

説教を始めるのかと思いきや、少年は周囲に目を凝らして黙り込む。もうすっかり暗くなった周囲は、私の目には何も見えない。今更に不気味な雰囲気森に背筋が凍る思いがした。

「最近はこのあたりの魔物も気が立ってるんだ。学園の兵士科のおかげで暴れられてないからな」

気配を探るような、緊張した声に身が締まる。今更になって自分かもこの少年に怯えていないことに気づいた。……凄い不思議。

そしてしばらく沈黙が続いて、少年が手を放す。

「学園までだろ？　ついてこいよ、送ってやる」

そう言つて先に歩き始める少年の背中を見る。

おかしいな、その背中がすごく頼りがあるものに見えるなんて。今さっき会ったばかりなのに。

狼少年と円舞曲を（1）（後書き）

長々と留守にしておりました。

グラン・エルデの恋歌、新たな主人公の登場です。
どうぞ見守っていただけると幸いです。

狼少年と円舞曲を（２）

さく、と草を踏む音がやけに耳に響く。

少し前を歩く少年は、ずっと黙ったままだ。夜の森は本当に真っ暗で、一人きりだったら私は大声で泣き崩れていただろう。

「……………ねえ」

沈黙が続いていることに耐えきれなくて口を開く。自慢じゃないけど私はおしゃべりな方で、いつも先生に怒られているくらいだ。それなのに彼は返事をくれない。

「ねえってば！」

少し小走りで駆け寄ってまた声をかける。

服の裾をひっぱって更に主張すると、鋭い目で睨まれる。思わず悲鳴を上げかけたのは秘密だ。

「黙って歩けないのかよ、あんたは。魔物に襲われても俺は助けないぞ」

「助けてよ！」

「そこまでの義理はない。案内してやるだけでも感謝しろよ」

はぁ、とあからさまにため息を吐き出されて続く言葉も飲み込む。だって、静かすぎると怖いから、なんて——言ったら怒られそうだ。

「……………あんたがしゃべっていると他の音が聞こえなくなるだろ」

そう呟いてまた彼は黙った。その目は周囲を警戒しているみたいにきょろきょろとしている。

……………もしかすると、魔物が近くにいないか警戒してくれてるのかな？

掴んだままの彼の服の裾を放すタイミングを逃して、そのまま歩調を合わせて小走りになった。

そしてしばらく歩くと、少し先に灯りが見えた。

ゆらゆらと揺れているそれは、たぶん松明の灯りだろう。

「迎えみたいだな」

ふう、というため息とともに彼が呟く。そして服の裾を握りしめたままの私を見下ろして、小さく「もう放せ」と言う。

「学園の兵士科の連中みたいだ。あんたを探しに来たんだろ。とつとと合流して戻れ」

ぶっきらぼうなその言葉に、優しさしか感じないなんて私は少しおかしくなってるのかもしれない。

このまま離れてしまふのが寂しい、なんて。

「放せ」

もう一度念を押すように言われて、私は仕方なく服の裾を放した。少し遠くから、私の名前を呼ぶ声が聞こえる。

「ほら、あんたのことだろ。マリア・コーエン」

低い声が私の名前を言う。見上げると鋭い瞳が少し困ったように私をまっすぐに見下ろしていた。

「……うん」

行くね、と言って声のする方へと一歩踏み出す。背後でさく、とまた草を踏む音がした。

「ねえ！」

このまま別れてしまふのが惜しい。その気持ちがいっぱり消えなくて私は振り返って彼を呼びとめていた。

暗闇の中で彼の瞳だけが光る。

「あなたの名前は！？」

一瞬の沈黙。

ゆらりと鋭い瞳が困ったように揺れた。

教えてくれるまではここを動かないんだから、と気合を入れると、はあ、と呆れたようなため息が聞こえる。

「ザギ。……じゃあな」

それだけ答えると、彼は——ザギは夜の森の中へ消えてしまった。

「一般科のマリア・コーエンさんですか？　もう大丈夫ですよ。私は兵士科の生徒です」

につこりと微笑むのは普通科でもちよつと有名な兵士科のお嬢様だ。貴族の令嬢なのにも関わらず兵士科に入学したって少し前に騒がれていたのを覚えている。もともと兵士科に入る女の子は少ないのに。

「同室のサリエ・サーベストさんから今日帰って来る予定なのにまだ、との報告がありました。ご実家に確認したところ既に発たれたのでしたので兵士科に搜索命令が出ました。お怪我はありませんか？」

丁寧な口調で説明してくれたのは私よりも小柄な女の子だった。たぶん年も私より下に違う。

「あ、はい。怪我はないです」

答えると、控え目に微笑んでくれる。そして振り返って後ろにいた男の人に——あの人は確か兵士科の教官だったはず——に報告する。

「キサラギ、他の搜索隊に伝達。コーリア、彼女を連れて来い。コルセンとキサラギが最後尾について学園へ帰還する」

「はい」

「はい」

「了解しました」

それぞれがそれぞれに返事をする。

……まさか兵士科の御厄介になることになるとは。普通が取り

柄だけだったのになあ、とその時には呑気に考える余裕があった。

寮の入り口まで送ってもらって、自分の部屋まで戻る。

明後日まで休暇だから、寮にいる子はいつもより少ない。家の近い子は明日か明後日に帰って来るんだろう。一般科は魔法科や兵士科と違って課題も持ち帰れるし、巡回の義務もないのでほとんどの生徒が帰郷するのだ。

がちやり、と部屋の扉を開ける。

部屋の中にはルームメイトのサリエがいて、机に向かって勉強しているところだったみたいだ。ちらりとだけこっちと見て、すぐに本へ視線を戻す。

「サリエ——！！ 心配かけてごめんねえありがとおおおお！！」
勢いよくサリエに抱きつく、うんざりした様子で「はいはい」とサリエが答える。

「どうせこんなことだろうと思ったよ。勉強の邪魔だからどいて」
いつも通りのサリエに「はい」と言って自分の机の椅子に座る。冷たいけどサリエは優しいんだ。

普通、ルームメイトは同じ科の人間のはずだけど——私とサリエはどちらも余ってしまった人間だったので、別の科だけど同じ部屋で過ごしてる。サリエは魔法科の生徒だ。それもけっこう優秀な！
少し前まで元気がなかったみたいだけど、最近はどうにか以前のようになるまえるようになった。たぶん、まだ少し無理してる。
だから私も早めに帰ってきたんだけど。

「で、怪我は」

サリエがこちらを見もせずに関いかけてくる。やっぱり心配してくれたんじゃない、とくすくすと笑う。

「大丈夫。どこも怪我してないよ」

「相変わらず悪運だけは強いね」

「ひつどーい。あ、でも今日は刺激的なことがあったよ」

森で出会った少年を思いだして身を乗り出す。サリエは「そもそも魔物がいる森で迷子になったこと自体が刺激的でしょ」と笑った。
「あのね」

ちよつとした得意話をする気分で今日の話を話し始める。

それまでは、ごく普通の日常の中の、時折起きる神様の気まぐれのような出来事だとしか思っていなかった。

狼少年と円舞曲を(3)

「ねえサリエ。今日は休んだ方がいいよ」

顔色の悪いルームメイトに向かってそう言うと、サリエは静かに首を横に振った。

「今日は兵士科との合同訓練なんだ。休んで欠員を出せば他に迷惑だから」

「でも……」

兵士科との合同訓練、そういう時はいつもいつもサリエは顔色が悪い。それなのに無理をして行くからこっちは心配で仕方ないのだ。「じゃあ行くから。マリアは？」

「今日は午前は休講なんだ。先生が出張らしくて」

一般科は一般教育を学ぶのが主だけど、担当している先生達は研究一番な人が多いのでよく休講になる。

「気をつけてね」

手を振ってサリエを見送ったけれど——どうにも気になる。

だってサリエの後ろ姿はどう見てもふらふらだ。無理をしていないなんて誰が言えるだろう。

「……………むう」

友達として、これは放っておけないだろう！

兵士科と魔法科の訓練というのは——もっぱらグラン・エルデの外、つまりは私がついこの間迷いに迷ったあの森でやるらしい。

「う、うう」

サリエや他の生徒の後をこっそりついていきながら早くも少し後悔した。森という嫌な記憶しかないような。

それでもたくさんの生徒の中に埋もれるサリエの姿を見ると、放つてはおけない。

「――女は根性！　だ！」

ぐつと拳を握りしめて私はまた一歩踏み出した。

たぶんきつと後悔はしないはずだ！！

兵士科と魔法科の生徒はだいたい七、八人のグループを作って森の中を探索するようだ。昼間といえど森の中には魔物がいる。その魔物と遭遇すれば討伐、しなければその痕跡を探ってどんな魔物がいるのかを把握する――なんとも実戦的な授業だなあ、と思う。

一般科と言えば本当に普通の学校だ。特別なことなんてない。それで良いと思ったから私は満足してるけど――。

「……あ」

しまった。

ちよつと考え事をしていたうちに、サリエを見失ってしまった。

周囲を見回しても生徒の姿はない。今日はこの間と違って探せば絶対に生徒がいるはずだ――それなのに、急に不安になる。

「うわーうわーやっちゃったあ、平気平気大丈夫。絶対すぐに誰か見つかるって。いやまあ見つかるのも問題なんだけどさ！」

少し大きめの声で不安を吹き飛ばすように話す。

昼間の森なら大丈夫。だってほら、まだ明るいし。魔物だってそんなにうるついてなんかいないって。

「大丈夫大丈夫大丈夫。だから落ち着け私！」

そう言って落ち着けるなら問題ないわけだけど。

がさつと背後の草むらが揺れて、悲鳴を上げかける。

「……またおまえか」

呆れたような低い声に、私はおそろおそろ振り返る。その声には覚えがある。まだ新しい記憶で――。

「ザギ？」

振り返った先には獣のような瞳の少年がいる。夜にあった時よりその瞳は鋭くなく、むしろ知っている人に会えたことで私は安堵した。

「良かったあ、ああもうやだ腰が抜けたあああ

へなへなとその場に座り込んだ私を変なものでも見るかのようにザギは見下ろしてきた。

「……この間でこりたと思ったんだが。何しに来たんだよ」

「こりたよ、こりたけど！　今回は特別だったの！　ああもう憎まれ口なのに安心するって私変かもー」

「変人」

「うわ、他人から言われるとむかつくー。変って言うな！　私はごく普通の女の子です！」

びしっとザギを指差してそう言う、虚をつかれたようにザギは目を丸くして、そのあとで笑った。

「自分で言わないだろ、それ」

くすくすと笑うその姿は、普通の男の子みたいだ。

シルバーグレイの髪が陽の光できらきらしてる。本物の銀みたいだな、と見惚れているとザギと目があった。

「人が来る。ちょうど良かったな」

今日は案内しないでいいだろ、と背を向けられそうになり――私は慌てた。

「ちょ、ちょっと待って！　私今日は見つかるとマズイんだよ！　隠れよう！　今すぐに！」

「は？ なに意味分らないこと言っ——」

「いいから隠れよう！！」

そんなこんなでザギと言い争っていると、木の根に足をひっかけ、私は後ろに倒れこむ。もちろん私が腕を掴んで離さなかったザギも巻き添えになって——二人仲良く地面に激突だ。

「いったあ……」

「あんたな、人まで巻き込んでおいてそれかよ」

お尻を盛大に打ったけど、頭は無事だ。どうしてだろうと目を開けると、私の頭の下にザギの腕があった。かばってくれたんだとすぐに理解して——。

「あ、ありが……」

お礼を言おうとした、その時だ。

「誰！？」

女の子の声が響いて、私とザギは声のした方を向いた。

魔法科の制服がすぐ目に飛び込んでくる。見知らぬその子は、こちらを指差して震えていた。

「た、大変よ！ 半魔が人を襲ってるわ！」

その声につられるように他の生徒がやってくる。魔法科の生徒があと二人、そして兵士科の生徒が四人——。

あれ？ もしかしなくても私のこと？

兵士科の生徒が剣を抜いた。うわ、嘘。

「貴様っ離れろ！」

剣は間違いなくザギを狙ってる。でもザギの腕は私の頭の下で——つまりはそう簡単に動ける状態じゃない。

——というかなんで襲ってくるの？ ザギは半獣人だけど、でもだからって人を襲うわけじゃないのに。

「ちが、」

違うよ。やめてよ。

ザギは私を助けてくれたんだよ。

そう弁解しようとする、私の頭上でチツと舌打ちが聞こえた。するとすぐに私の頭を支えていた存在が消えて、のしかかっていた重みも消える。

「逃がすか！」

他の生徒がさらに追おうとしている姿を見て、私は身体を起こして叫ぶ。

「やめて！」

私の制止の声に、生徒はみんな不思議そうな顔をした。その隙にザギは森の中へと消えていく。

「ザギ！」

私は立ち上がってすぐにその背中を追おうとしたけれど——深い森の中へ姿を消したザギは見つかるはずもない。

——ありがとうも、ごめんねも言わせてもらえなかった。

狼少年と円舞曲を（４）

「マリア、いいかげんに離れて」

呆れたようなサリエの声に、私はただ黙って首を横に振った。

兵士科と魔法科の合同訓練は終わって、私は先生からみっちりとお説教を受けてきたばかりだ。

いつもは憂鬱なお説教の言葉達も、今日だけは私の頭に届くことなく表面を滑っていった。それでも表情だけはしっかり落ち込んでいたから、思った以上に早く解放されたのだ。

落ち込んでいるのは事実なのだから、仕方ない——先生が考えているような理由ではないけれど。

「ねえサリエ。もし誰かを傷つけたかもしれない状況で、サリエならどうする？」

サリエの背中に張り付いたまま問うと、サリエは観念したようなため息を零した。この状況の方がサリエは問題なんだろう。

「謝りに行く。それしかないでしょ」

「それが難しい場合は？」

「謝る謝らないで難しいなんてことはない。以上」

つれない態度のサリエにがっかりしつつ、そもそも会いに行くことが難しいんだよ、とは言えなかった。まさかグラン・エルデの外にいる人なんだ、なんてどうして言えようか。

お説教のあとの、先生の言葉を思い出す。

今思い出しても胸糞悪い。

『グラン・エルデの外の森に半魔がいたとはね。どうせどこかの金持ちの家から逃げてきたんだろ』

確かに半魔は労働力としてお金持ちに飼われていることが多い。

愛玩用としてもありえる。

それがこの世界の嫌な常識だし、少し前まで私も「仕方ないこと」ですませていたはずなのに――。

自分の恩人を、そんな風に言われるのはものすごく嫌だ。

「……会いたくて仕方ないので、どうしてだろうね」

ぼつりと呟くと、サリエが急に黙り込む。

少し強張った身体を不思議に思っ、サリエから離れる。

ああ、あの顔だ。

悲しんでいるような、後悔しているような、それなのにどこか大切なものを守るかのような、そんな不思議な顔。

「……サリエ？」

首を傾げて問うと、サリエは苦笑した。

「恋、かもね」

予想外の答えに、私は目を丸くした。サリエは苦笑したまま私から離れて机に向かう。その後ろ姿がこれ以上話しかけるなど言っているようだった。

まさか。

私がザギに恋してる？

そんなわけがない。だって私は普通の恋をして、ごく普通に生きていくんだから。

——そんなわけ、ない。

しばらくは学校なんて気分じゃなかった。

けれど現実には容赦なく、学校へと行かねばならない事情で締め付けられているものだ。

「……なんで兵士科に呼ばれるんだろう。やだなー、なんかしたかなー」

したけど。もうしたけど。

でもあの日の件に関してはみっちりお説教を受けた。これ以上はご免こうむりたい。

「失礼します」

はぁ、と大きなため息を吐き出しながら兵士科の教官室へ入る。

すぐに一人の教官が気づいて、手招きされた。ザギと初めて会った時に助けてくれた、あの教官だ。

「わざわざ悪いな。二、三聞きたいことがある」

「はぁ」

聞きたいことって一般市民の手本みたいな私に聞いても何も参考にならないと思いますけど。

「先日、おまえと一緒にいたという半魔とは知り合いか？」

びく、と身体が反応した。

今一番触れて欲しくない話題に、自然と表情は暗くなった。

「知り合い、というか……この前森で迷った時に助けてもらったんです。教官が来る前に、街まで案内してくれるって」

「では襲われていたという訴えはやはり偽りだと？」

「あれは、助けてくれたんです！」

細かい説明を口にするよりも先に、言葉が出た。

「ザギは、転んだ私をかばってくれたんです！ 襲われたなんてとんでもない——」

口早に言つと、教官は冷静に「そうか」と呟く。紫色の瞳がびつくりするくらいに冷静さを秘めている。つられて少しだけ私も頭が冷えた。

「一部の生徒から探し出して然るべきところへ、という話が出ていてな」

「……然るべき、ところって」

「どこですか、と問おうとして口籠もった。なんとなく嫌な予感がして。」

「逃げだしてきた半魔ならば、主である家にだな」

「そんな……」

たとえば本当にザギがどこからか逃げ来たのだとしたら、それはそれだけ過酷な状況に置かれていたということだろう。なのに、またその場所に戻すなんて――。

「……嫌です」

言葉は自然と零れ落ちた。

だって嫌だ。ザギが苦しいのは嫌だ。悲しいのも痛いのも嫌だ。傷つけてしまったというのに、なんて都合のいい。自分でもそう思うけど、でも嫌なんだから仕方ない。子どものように駄々をこねることが出来るなら楽なのに。

「……危険性がないというのなら、手出しする必要はないだろう。」

それに現在のところ学園に半魔の搜索願いは届いていない」

教官はため息を零しながら、そう答えてくれる。

それはつまり、ザギをそっとしておいてくれるということなんだろうか。

「ありがとっ、ございます」

ほっとしてそう答えると、教官は何も言わずに複雑そうな顔をする。

「ジェイド教官！ 今日の訓練は——あ、失礼しました！」

突然教官室の部屋に顔を出した『例のお嬢様』は私を見た瞬間に慌てて頭を下げる。

「今行く。おまえもあまり心配はするな。ひどい結果にはならないように努力はする」

ずっと教官は立ちあがって私の頭を撫でた。

すぐにお嬢様に指示を出して、本人はすたすたと教官室から出ていってしまう。

「……あなた、この間の——マリアさん、ですよな？」

お嬢様は首を傾げながらこちらを見ていた。私なんかと話すような話題はないはずなのに、と私は慌てるしかない。だって貴族のお嬢様と話す機会なんて今まで無かったから。

「え、あ、はい！」

「何を心配してるのかは知らないけど、でもジェイド教官なら大丈夫だよ。優しい人だから」

につこりと微笑みかけられ、私はぽかんと口を開けて立ちつくす。お嬢様はそれだけ言うと、慌てた様子で走り去った。

「……大丈夫、かな」

教官も、お嬢様もザギのことは心配ないって言うてくれた。なら、大丈夫なのかもしれない。

「——会いたいな」

大丈夫かとか、心配とか、関係なく。

ごめんね、ありがとうって。

伝えきれなかったそれだけを、伝えたいな。

狼少年と円舞曲を（5）

善は急げとよく言います。

普通が一番の私も、少しだけ行動力には自信があります。

だから私は覚悟を決めるとグラン・エルデの外へと飛び出していた。まだ夕方まで時間もある。急げば――ザギに会えるかもしれない。

一日ずっと悩んで悩んで――。

悩むことが馬鹿馬鹿しくなつて、私はとにかく行動に出ることにした。

「だって考えてるなら動いたほうが早いし、会えば何か妙案が浮かぶかもしれないし、何よりうじうじしているのってあんまり私らしくないし！」

森の中を走る足は、正直少しだけ震えてる。

だってザギと会ったこと以外はあんまり良いことがない。

「怖くないぞー怖くないんだからなー！」

唸りながら走り続けて、森の中を進んでいく。ある程度奥まで進んで立ち止まった。

……どうしよう。

いつも森に入ってから比較的早くザギと遭遇していたんだな、と思う。ザギがどのあたりにいるか、私には見当もつかない。

それとも、ザギは私を見つけても会いたくないのかな。

そう思うとじわりと涙が滲んできた。うわ、ここで泣くとか駄目だよ、と自分に言い聞かせるけどもう遅い。

ごめんね。

ごめんね。

何度もそう繰り返して、ぼろぼろと涙を零す。

「ザギ、ごめんね」

そう嗚咽交じりに呟いた時だった。

ぐるる、と低い唸り声がした。

「――！」

それが、まさかザギの声のはずがない。

まだ太陽は高いところにあるのに、運悪く私は魔物に見つかってしまったんだろう。

足が震えた。怖くて振り返ることも出来ない。その気配は確かに近づいてきていて、私を今にも殺そうとしている。

ああ、やっぱり馬鹿だったのかな。

そんなふうに思っただけ目を瞑った。

「馬鹿かおまえは！」

怒鳴り声が聞こえた瞬間、ふわりと身体が浮いていた。目を開けるとすぐ傍にはザギの顔がある。

「え、ザギ？」

「呆けるな！ 死にたいのか！」

言いながらザギは私の身体を持ち上げたまま、一息で高い木の枝に登った。身体能力が高いというのは知っているけど、こつも軽々と持ち上げられると驚くしかできない。

「あの手の魔物は木には登れないから、これで大丈夫だ。ただこのままだと朝になるまで動けないけどな」

はあ、とため息を零しながらザギは呟く。

「ザギ、良かった、会いたかったんだ！」

落ちないように、とザギは私を支えてくれてるけど、そんなもの関係なくザギの首に抱きついた。

「うわっ馬鹿！ 落ちるぞ！」

「ごめんねごめんねごめんね！ 助けてくれたのに嫌な思いさせてごめんね」と助けてくれてありがとおおおお！」

ぎゅう、と抱きついて訴えると、耳の近くで呆れたようなため息

が聞こえた。

「おまえ、そんなことわざわざ言いに来たのかよ？ あんなの普通の人間じゃ当たり前の反応だろ」

「違うよ！ 私普通だもん！」

私は即答するけど、ザギは苦笑するだけだ。

「他の人はザギがどこからか逃げてきたんじゃないかとか、危ないんじゃないかとか、そんなひどいことばかり！ ザギは私の命の恩人なのに！」

「そりゃ、こんなところに半魔がいたら誰でもそう思うだろ」

それが当然のようにザギは言った。

「……やっぱりザギは、その、前に……」

上手く言えなくて、口籠もる。人に飼われていたの？ なんて犬か猫かみたいな言い方は嫌だった。

「俺の場合は奴隷商から逃げてきたクチだから貴族とかのそこには行ったことないよ」

ザギはさらりと答えてくれた。まるで自分には関係ないことみたいに、軽い口ぶりだった。

「そう、なんだ」

「その奴隷商のこの間捕まったらしいから、俺には関係ないことだし」

そういえば少し前に兵士科で結構な大捕物があったらしい、なんて聞いた気がするなあ。その時の奴隷商なのかな、と他人事のように思う。

「じゃあ」

本当にザギは何も悪くないじゃない、と呟きかけて、木が大きく揺れた。

「きゃあああああ！？」

慌ててザギにしがみつく。油断していたけど私達は魔物に狙われていたんだ。

「落とすつもりみたいだな」

ザギが冷静な顔で下を見下ろした。さつき遭遇した魔物は諦める様子はなく、私達が登っている木に体当たりをしている。はらはらと葉っぱが舞い落ちていく。ザギに支えられていなければ私は早々に落ちていたろう。

「な、なんて諦めの悪い……！ 私を食べたって美味しくないんだからね！」

だってそんな肉付き良い方じゃないし！

「おまえ、結構呑気だよな」

呆れたようにザギがそう言う。呑気じゃないよ！ かなり焦ってるよ！

「これ他の魔物が来たりしたら……」

「終わりだな」

さらりとザギが言うけど、それかなり大事だから！ 嫌な想像をしてみたって、頬を汗が流れおちた。たぶん今の私は顔色が悪いと思う。

「どどどどどどうしよう！？」

「どうしようもないだろ。逃げ道はなし。木が倒れないままで、魔物が来ないことを祈るしかない」

「そんな！？」

それってかなり絶望的な気がするのは私だけ！？

私がそう叫んだ時だった。

耳を塞ぎなくなるような、獣の断末魔が響いた。途端に木の揺れは収まって、私とザギは顔を見合わせた。

「おい、下りて来い。もう大丈夫だ」

下からそんな声が聞こえて私はおそろおそろ下を見る。

そこには今朝話したばかりの兵士科の教官と、例のお嬢様——それから兵士科の生徒が二人立っていた。どうやら助けられたらしい。「片付けてくれたみたいだな。下りれるか？」

ザギが同じように下を見て、私に問う。結構高い枝にいるから、スカートのまま下りるといふのはかなり危険だ。けどそれ以前に。

「……無理。安心したら腰ぬけた」

おろして、とザギにお願いすると「そんなだろうと思った」とザギは私を抱きかかえる。片手で軽々と持ち上げられ、着地の瞬間には夢にまで見る『お姫様だっこ』の状態だった。これは恥ずかしい。

「姿がないと聞いて来てみれば……また説教されたいのか、おまえは」

呆れたように教官に言われ、私は小さくなる。いてもたってもいられなかったんです、と言いつけても無駄だろう。

「友達が心配なのは仕方ないじゃないですか。無事だったんだし、あんまり責めるのは可哀想です！」

お嬢様が果敢にも教官にそう言ってくれるけれど、悪いのは私なわけです。

「……ご迷惑おかけしてすみません」

こつも短期間に兵士科のお世話になるとは私も考えもしない。

ザギと出会ってからはいろんなことが起きすぎているくらいだ。

「——まあ、今回は俺達だけで済んだ分、大目に見てやる。……それで、おまえが例の半魔か」

教官の目がザギに映った瞬間、私は「あの！」と声を出していた。

「ザギは何も悪いことなんて——」

「分かっているから、おまえは黙ってる。相談、というか提案がある」ザギが訝しげに教官を見た。悪い人じゃないということは分かってくれていると思うけど、初対面でこんなことを言われれば警戒するのは無理もないことだろう。

「ここで生活を続けるわけにはいかないだろう。学園の兵士科に入学しないか」

「ええ!？」

ザギが驚くよりも先に私が驚いた。教官に目で「黙ってる」と言

われて私は自分の手で口を塞ぐ。

「他に例がないわけでもない。全寮制だから住む場所も確保できて、将来もそこそこ安定する。学園にはいろいろツテがあるしな」

「そんなことして、そっちにメリットはない」

だから簡単には信用できない。そう言いたげな目でザギは教官を睨む。

「メリットならある。有力な戦力になるだろうし、おまえが奴隷商に捕まっていた間の記憶次第ではまた奴らを捕まえられるからな」
教官はたぶんザギの反応を予測していたんだろう。一枚の紙切れを差し出して続けた。

「今すぐ決めるとは言わない。これを持ってくれば門はくぐれる。その気があるなら、俺のところへ来い」

それだけ言うと、教官は踵を返して「帰るぞ」と言った。その中には私も含まれているんだろう。

紙切れを握りしめたまま、ザギは黙り込んでいる。

その姿は、もう答えを見つけているような気がした。

「置いていくぞ！ 早くしろ！」

教官たちが早くも先へ行ってしまった。

私は「はい！」と大きく返事をして、またザギを見つめた。ザギは少し困ったように私を見る。

「またね、ザギ！」

私は満面の笑顔でそう言って、慌てて教官たちを追う。

また次があると、私は確信していた。根拠はない、けど必ずまた会えるって思っていた。ザギが学園へ来ようと来なかつたら。

だって私は、何度だってザギに会いに行くと思っているから。

数日後、兵士科には新たな生徒が加わった。
森まで会いに行くことにはならなかったな、と私は廊下を走りだしながら思う。

「ザギ！」

訓練場で剣を握るその姿を見つけて、私は名前を叫ぶ。
照れたように振り返るその人に向かって、私は笑顔で手を振る。

普通が一番。

普通がいい。

さて、この恋は果たして普通の恋になりえるんだろうか？

優等生の狂想曲（１）

グラン・エルデの中でも兵士科は極めて特殊なカリキュラムがある。兵士科出身の生徒は各国で騎士団や軍へ進み重宝されるのも、実戦的な授業の賜物といえるだろう。

ジェイドの担当する噂のお嬢様ことコーリアも、もちろん容赦なくその授業に参加することになる。兵士科の中でも一番面倒で一番疲れると有名な課外授業だ。

「おはよう。昨日はちゃんと眠れた？」

集合場所へ向かう小さな背中を見つけて、シオンは声をかけた。綺麗な深紅の髪は肩で切りそろえられ、振り返った大きな瞳は琥珀色だ。肌の色は透けるように白く、彼女の容姿を見た人間はおよそ兵士科の生徒だなんて思わないだろう。

「おはようございます、シオンさん」

にこ、と控え目に微笑むエナは、最近になって「キサラギさん」から「シオンさん」へと呼び方を変えた。シオン本人の意向によるものだ。慣れるまでしばし時間がかかったが——今ではごく当たり前のようになってくれた。

「私は早めに就寝したんですが、コーリア様が」

そう言いながら苦笑するエナに、シオンも苦笑いを返す。元気なお嬢様は気が昂ぶってなかなか寝付けなかったんだろう。

「それで？ 君が先に登校したってこと？ いつもは一緒なのにね」
くすくすと笑いながら問うとエナはこくと頷く。コーリアの成長のためか、それとも彼女自身の自立のためか——この奇妙な主従関係は徐々に緩やかになってきている。

「寝坊はされてましたが、目は覚めていましたし、準備も昨夜のうちに整えていたので集合時間には間に合うと思います」

今頃必死に身支度を整えてるんだろっなあ、とコーリアの慌てる姿を想像しつつ、シオンは微笑む。

「じゃあ今日は俺が一緒にいてもいいかな？」

「？ どうぞ？ というより先程から一緒に歩いているじゃないですか？」

エナは今さら、と言いたげに首を傾げるが、異論はないようだ。どうもこちらがいくら押しても引いても効果がない。

本人はやはり自覚がないのだろう。同じ隊の人間はシオン達よりも年長だし、シオンの想いに気づいているのでノータッチだが、他はそうではないのだ。エナの容姿はかなり人目を引く。小柄だからこそ目立たないが、噂のお嬢様と一緒にいることでエナの知名度も上がっているのだ。お近づきに、と考えている生徒は兵士科だけではないだろう。

「シオンさんは課外授業は何回目ですか？」

初参加となるエナはどんなものか気になるところなのだろう、こちらを見上げながら問いかけてくる。

「これで二回目。そんなに気負わなくても平気だよ。ちょっと遠出して、山に登って魔物を片付けて下山するだけ」

「ちよつとで片付けられる内容ではないと思いますけど……」

「不安？」

問うと、エナは素直に頷いた。

「コーリア様の体力が持つか……入学時に比べればずっと体力がつかまりましたけど、さすがに厳しいかもしれません」

かくん、と気が抜けたのは仕方ないことである。エナはやはりどんな場合においても「コーリアの使用人」であり、彼女自身そのことに疑問も不満も抱いていない。心配の優先順位が違うのは今に始まったことではないが。

「今回はもちろんそれを考慮に入れてと思うよ。教官も馬鹿じゃないんだし」

「教官の判断は信頼してます。問題はコーリア様が無茶をするかと

いうところで」

まあ、あのお嬢様なら無茶も無理もするんだろうけど。

「それをフオー……というか暴走を止めるために教官も俺も、君もいるんだ。大丈夫だよ」

励ますようにエナを頭を撫でると、ほっとしたように彼女は笑った。幼さの残る顔立ちに、愛らしさが相まってかなり心臓に悪い。

本当に、一体俺はいつまで踊らされてればいいんだろうね？

苦笑しながらシオンは手を放す。「私の神様です」なんて熱烈な告白をされたと思ったのも束の間——そういった類いの感情ではないと否定され、困っているのはシオンの方だ。エナといえば話しやすく信頼できるシオンにすっかり懐いている。シオンだけは絶対に信じられると思ってくれているほどに。

「……………生殺しだなあ」

ぽつりと呟くと、エナは首を傾げてシオンを見上げる。

「何か言いましたか？」

幸い、エナの耳にシオンの呟きは届かなかったようだ。苦笑いを浮かべたまま、「なんでもないよ」と誤魔化す。

シオンにとっての問題は、目下のところこの少女との距離にあった。

「遅刻ぎりぎりだぞ、おまえは。いつまでもコルセンに頼ってないで自立しろ自立」

息も絶え絶えになりながら集合場所に走ってやってきたコーリアに、ジェイドはため息を吐き出しながらそう叱った。その言葉の端々に分かりにくい優しさがこもっていることに気づくのはごくわずかだ。

「だ、だって、なかなか、寝れ、なくて、ですね！」

「早めに就寝しろと言っただろうが。遠足前のガキがおまえは」

はぁ、とまたため息を零してジェイドはコーリアの額を小突く。

「とりあえず何組かに別れて現地へ向かう。個々の進行速度を考えても昼過ぎには到着するだろう。一番最初に着いた奴らはきっちり挨拶しておけよ」

それは暗に教官であるジェイドが遅れると言っていた。それもそのはずだ。ジェイドの率いるメンバーの中にはコーリアとエナがいる。エナは乗馬を習い始め、どうにか一人でも乗れるようになったが——コーリアは誰かと同乗するしかない。そうならば自然と馬も疲れやすくなる。

「教官、コルセンさんだけでもこちらで預かりますか？ その方が進行に差が出ないと思いますが……」

そう進言したのは、ジェイドの隊ではない生徒だった。課外授業は複数の隊で行われ、そして今回は交流の深いネデイルの隊と一緒にだ。

「私はコーリア様から離れるつもりはありません」

エナはきっぱりとそう言い切った。ジェイドは苦笑しつつ「だ、そうだ」と答える。

「そもそもコルセンは進行の差に関係ない。お荷物はコレだけだ」
コレ、と指差されたのはもちろんコーリアだ。

「ひ、ひどくないですか教官！？ 私だって日々頑張ってるのに——！！」

「努力は認めてる。まあネデイルが先に到着するだろう。こっちは新人もいることだしな」

そう言いながら目を向けたのは、つい数週間前に入学した半魔のザギだ。ジェイドの根回しの結果か、当然のようにザギはジェイドが引き受けることになった。

思えば個性豊かなメンバーだな、とシオンは笑う。

「彼女のフォローはこちらですのでご心配なく。既に他も出発し

てますし、我々もそろそろ行きましょう」

につこりと笑いながら進言してきた生徒に釘を刺す。そしてシオンはさも当然のようにエナに手を差し伸べた。

「行こう。ただでさえ遅れるんだし、さっさと進まないかね」

「はい」

エナは疑問も感じずにシオンの手をとる。普段一緒にいることが多いから、これくらいは日常でもあることだ。乗馬の訓練だって、シオンがほとんど協力した。

重ねられた手を、ほんの一瞬だけ強く握り締める。これくらいの独占欲は、許して欲しいと思うところだ。

「神様」とやらの特権としてでも。

優等生の狂想曲（1）（後書き）

今回は以前に登場したシオンの物語です。
違う視点から楽しんでいただければ幸いです。

優等生の狂想曲（２）

馬で駆けている間も、エナは疲労の色を見せなかった。どちらかというとジエイドに同乗させてもらっているコーリアの方がバテ気味だ。ザギは黙々と走っているし、このままでいけば予定より少し早めに到着するかもしれない。

お疲れのお嬢様の為に、少し休憩することになった。

「ザギ、ちゃんと挨拶はした？」

あまり疲れていない様子から、会話する余裕くらいはありそうだと話しかけると、ザギは何のことを言っているんだとでも言いたげにこちらを見てきた。普通の人とは違う細い瞳孔は、慣れてしまえばただの特徴に過ぎない。ザギは根はいい奴だと兵士科では浸透している。

「マリアさん、だっけ？ 学園を抜けるんだから、黙っていなくなつてたら心配するんじゃない？」

「……あいつには、昨日会ったから世間話のついでに話した」

それなら良かった、と笑うとザギは居たたまれなさそうに顔をそらす。一般科の生徒と仲がいい——というより学園に入学するきっかけだったのだから、ある程度報告は欠かさない方がいいだろう。大きなお世話だろうけれども。

「マリアさんでしたら、三日に一度の割合でザギさんに会いに来てますよね」

エナがさらりと呟く。本人に他意はないのだろう。ああ、そんなに頻繁なんだと思ったのは、シオンが他人のことには深く入り込まない性格だからだ。おせっかいは鬱陶しいと思わない程度まで。それ以上は深入りしない。

「……あいつが勝手に会いに来るだけだ」

照れ隠しのようにむす、としてザギが呟く。その子どもみたいな反応にシオンはくすくすと笑った。

「まあ、心配かけないためにも怪我をしないで帰らないとね」

そうシオンが締めくくると、ジェイドが「行くぞ」と出発の合図をする。コーリアだけはげっそりとして返事をし、他は自分の馬に乗りまた目的地まで駆け出した。

目的地の山の麓には、学校の施設がある。主に使うのは兵士科だが、魔法科や一般科でも稀に研修旅行と銘打ってこの施設へ泊まりにくるようだ。

そして、兵士科が今夜泊まるのはこの施設ではない。後ろにそびえる山に登り、そこで野営するのが今回の目的だ。

「……今から？ 登るんですか？ この山を？」

移動で疲れたコーリアが信じられないとも言いたげにジェイドに問う。

「最初からそう言ってるだろうが。そんなに高い山でもないし、頂上までいくわけじゃない。安心しろ」

「うう、知ってはいたけど知りたくなかった」

コーリアがため息を吐き出しながら荷物を背負い直す。

「……コーリア様、大丈夫ですか？」

エナが心配そうに問いかけると、コーリアは笑顔で答える。

「大丈夫よ、心配しないで、エナ。私なんてほら、教官にずっと乗せてもらってたからそれほど疲れてないし」

コーリアの強がりには、エナには通用しない。まだ限界ではないだろうが、このまま登山というのはコーリアとしてはかなり厳しいはずだ。

「無理は、しないでくださいね？ 疲れたらちゃんと休んでください。約束ですよ？」

じっと見つめていつてくるエナに、コーリアは苦笑しながら頷いた。それでもコーリアやエナが背負っている荷物は軽い方だ。個々

人が最低限に必要なものと、隊の中で必要になつてくるだろうもの。テントやら重いものはほとんど男性陣が背負っている。

「相変わらず、お嬢様に甘いね、君は」

苦笑しながらシオンがそう言つと、エナは当然のように頷いた。

「コーリア様が私を甘やかす分、私もそうしているだけです」

頑なだなあ、と笑うしかない。それでもそんなところも可愛いと思つてしまっているんだから、自分もこの子に相当甘いな、とシオンは頬を掻いた。

山歩きは思つていた以上に厳しかった。道のりはそう長いものではないはずなのに、背負っている荷物が足かせになつている。それでも慣れた先輩はさくさくと登つていくし、しんがりを務める教官は顔色一つ変わっていない。

「——平気？」

苦しそくに一歩ずつ進むエナを気遣いながら問いかけると「まだ大丈夫です」と答えが返つてきた。二度目のシオンもそれなりに厳しくはあるが、やはりこんなことに慣れていない女性陣ほどではない。ザギはシオンよりも平気そうに登り続けていた。

後ろを見れば、最後尾にはコーリアとジェイドがいる。ジェイドもこういうところでは教官らしく、コーリアの荷物を持つてやることはない。コーリアもそれを理解しているから、肩で息をしながらも黙々と登っていた。

「道、気をつける。滑ったら川に落ちるぞ」

先に行くザギが一言声をかける。周りを見てみれば、隣に傾斜があり、水音が聞こえてくる。

今にも膝をつきそうなコーリアを見て、ジェイドがため息を吐き出した。

「一度休憩だ」

コーリアは小さく頷いて、腰を下ろそうとする。その時背負っていた荷物のせいでバランスを崩し、倒れそうになった。

「コーリア様！」

疲れていたはずのエナが一番に反応する。コーリアが倒れる先は先程話した傾斜だ。このままだと転がり落ちる。そう誰もが思った。
「ばっ……」

咄嗟に一番近くにいたジェイドがコーリアの腕を掴む。からから、と石が川へと落ちていき、ほっと息をついた時だった。

「きゃっ」

コーリアへ駆け寄ろうとしたエナの足元が崩れる。皆が油断していた時のことで、エナの身体はふわりと浮いた。

「エナ！」

今度はコーリアの悲鳴が響く。突然のことにエナは目を丸くしていた。魔法を使おうという頭すら働かない。

エナの赤い髪が揺れて、下を流れる川へと吸い込まれていった。

「エナ——！！」

手を伸ばそうとするコーリアの身体をジェイドが押さえつけた。

エナが川へ落ちた瞬間、追うようにもう一つの人影が川へ落ちる。

「……え？」

コーリアが呆然と呟く。コーリアのすぐ隣でジェイドが舌打ちをした。

「キサラギ！」

先程までいたはずのシオンが、エナを追って川へ飛び込んだのだ。川の流れは早く、もう二人の姿は確認できない。

「先へ行つて他の隊へ知らせた方が良さそうだな」

ザギがすぐ冷静に動いて、荷物を置いたまま駆け出した。その方が早いと判断したのだらう。幸いにして野営地まではもうそれほど距離はない。

流されたエナを捕まえて、どうにか川を上げる。

「はっ………は、よく、生きてたなあ」

はは、と苦笑しながらエナを抱えて一息つく。落ちた衝撃のせいだろう、エナは気を失っていた。咄嗟に魔法を使い、どうにか二人川からの脱出に成功したのは自分でも褒めていいところだろう。

周囲を確認しても、あるのは樹と川だけだ。

「……さて、どうしようか」

ふう、と空を見上げながらため息を吐き出して、シオンは腕の中で眠る少女を優しく抱きしめた。

優等生の狂想曲（3）

「——ん……」

どうしたものかと思案していると、腕の中で華奢な彼女が身じろぎする。

「起きた？」

声をかけたのと、エナの琥珀色の瞳が見えるようになったのはほぼ同時だった。状況を理解出来ないエナはぼんやりとシオンの顔を見上げている。

「……すごく、身体が痛いです」

「そりゃあの高さから川に落ちたからね。咄嗟に魔法で衝撃を軽くしたつもりだったんだけど、間に合わなかったかな」

頬に張り付いているエナの髪を払い、優しく微笑んだ。たぶん自分のことをよく知る者がここにいれば目を丸くするだろう。今までこんな『特別』は作らなかったから。

「！ 私！」

やっと現在の状況が把握できたのか、エナは起きあがった。腕にかかっていた重みが消えて、どうも寂しい気分になる。

「川に落ちて、流されて、現在地は分からない。だいが流されたよってしか俺に言えることはないかな」

「……まさかシオンさんも、一緒に？ どうしてそんな危険なこと……！」

一緒にいるはずのないシオンの姿に、エナはそう呟く。

——どうして、とそんなことを言われても答えは言えない。

「君一人で落ちた場合、魔法を使う余裕もなく気を失っていたと思うよ。そうなればもっと流されたし、最悪の場合は溺死かな。川に落ちた時の衝撃で骨折していたかもしれないしね」

シオンを巻き込んだという罪悪感からだろうか、エナは俯いたまま黙り込んだ。

気にすることはないよ。俺が君を助けたかったんだから。そう言うことは簡単だが、天邪鬼な性格が災いして本音を口に出来ない。だって、俺は君の神様なんでしょう？

だったら期待を裏切れないじゃないか。君が助けを求めている時に、手を差し伸べなければ。

「……一人より二人の方がずっといいと思うよ。とにかく移動しよう。このままだと風邪を——っ！」

上手くない慰めの言葉を口にして——直後足首に鋭い痛みがはしった。反射的に身につけていた短剣を引き抜き、目標に突き刺す。

「シオンさん!？」

異変に気付いたエナが駆け寄って来るのを制して、それを見る。

「……蛇、だね。まずいな……毒のある種類だったみたいだ」

急速に体内を廻る毒素に眩暈がした。こんなところで自分が倒れては——ここにいる意味がないというのに。

「シオンさん！　しっかりしてください！」

しかし意識は暗闇へと落ちていく。彼女の声がどんどん遠ざかっていくような気がした。

——意識したきつかけはなんだったんだろう。

小柄な彼女は、意識しない限り視界の中には入ってこない。

有名な貴族のお嬢様の付き人、という話はすぐに耳に入り、そして自分がその相手をさせられる結果になったのも予想はできた。

なにしろ兵士科の男といえば、異性に慣れている奴と慣れていない奴に分けられる。

慣れている方に分類され、なおかつ悪さをしない人間というもの

は少ない。そして自分がその少数派に入ることにも自覚している。

第一印象は、小さいな、だった。

彼女は自分の胸くらいしか身長がなく、それだけでなく華奢だった。

そしてその身体には不釣り合いなほど、瞳だけが強く輝いていた。知識の飲み込みは思っていた以上に早く、そして剣の腕もその小柄さからは想像できないほどまで上達した。

あまり表情の変わらない顔も、彼女の主と俺の前ではころころと変わるようになった。

こちらがはっと目を奪われるくらいに綺麗に微笑むから、目が離せなくなった。そしてその笑顔を見られる異性がおそらく自分くらいだ、という事実は小さく心をくすぐった。

彼女が特殊な環境で育ったであろうということくらいはすぐに想像ができた。でなければ、年齢に合わない華奢な身体も知識の程度も説明がつかなかった。

それでも惹かれた。どうしようもないくらいの引力で。

——その上、あの「私の神様」発言だ。

でも、ごめんね。

俺は、君の神様になりたいわけじゃないんだ。

君の特別な存在になりたいんだ。神様なんていう、信仰の対象じゃないくて。もっともっと身近で特別な。

恋人と呼ばれるその位置に。

「——っ！」

喉の渇きで目が覚めた。

薄暗く、湿った空気がその周囲を満たしている。

「……気づきましたか？」

不安そうな声に、重い頭を動かした。

ああ、ついさっきと逆だな、なんて思いながら。それがつい先ほどのことなのかどうか分からないけれど。

「ここは洞窟か何か？」

「はい、そうです。とにかく濡れた服を乾かす必要がありましたし、シオンさんの治療のためにも雨風を防ごうと……」

事前に学んだ内容をきっちり覚えていた彼女に微笑みかけつつ、はたと気づく。

「君が、ここまで運んだの？ それに治療って」

気づけば自分が下着以外は身につけていない。かけられていた毛布は荷物の中にあつたもので間違いないだろう。エナも毛布にくるまっている。

「荷物の中に毒消しはありましたから、それを飲ませました」

「飲ませたって、どうやって？」

エナよりも体格の良いシオンを抱きかかえることも、意識のない相手に薬を飲ませることも難しいはずだ。

「口うつしで、直接」

「——っ！！」

やっぱり、と頭を抱えた。

それは俗に言えばキスということになるんじゃないだろうか。

「すみません。私の力ではシオンさんを抱き起こすことは出来なかったの……」

エナは申し訳なさそうにしゅん、としてそう呟いた。もちろんシオンは怒っているわけでも悲しんでいるわけでもない。ただ情けないだけだ。

「……いや、うん、ありがとう。助けたつもりが助けられちゃったね」

エナを落ち込ませたままに出来るはずもなく、曖昧な笑みを浮かべてそう答える。内心では穴があれば入ってしまいたいくらいの羞恥に駆られていた。

あんなにかっこつけて、この様だ。

「いえ、そもそもシオンさんが助けてくださったからこうしてられるわけなので。……何度か、隊の人達を呼んでみたんですが、反応がないです」

エナは洞窟の入り口をちらりと見て呟く。

彼女の言う「呼んだ」はもちろん大声をあげたわけではない。魔法の一種であるテレパシーのことだ。

「まあ、俺達はその種の魔法の練習はしてないし、純粹に相性も絡んでくるから」

相性が良い人間になら、練習を重ねなくとも『声』は届く。エナとシオンがそうであるように。

「とりあえずは身体を休めよう。既に隊の連中も探してくれてるだろうしね」

エナを不安にさせない意味も込めて、柔らかに微笑んだ。

人知れず川へ落ちたのなら問題だが、何しろエナとシオンは教官であるジェイドの目の前で落ちたのだ。すぐに他の隊にも知らせ、今頃は魔物狩りではなく自分達の搜索に目的が変更されているだろう。

「具合は……？ もう、平気ですか？」

心配そうな声に、エナの方を見れば琥珀色の瞳が揺れている。責任でも感じているのだろうか。

「もう大丈夫だよ。ありがとう」

微笑めば、ほっとしたようにエナの顔が綻ぶ。

ああ、迎えなんて来なければいいのに。

そんな不謹慎なことを考えるくらいには、体力が回復しているみたいだと笑うしかない。

優等生の狂想曲（４）

火に照らされているからだろう。目の前にいるエナの顔が赤く染まる。自分の顔もそうなっているだろう、とシオンは思った。

「みなさん、来ないですね」

沈黙が支配していたその場で、エナがぼつりと呟く。下手に動きまわれば体力を削るだけだし、動かない方が得策だろうと洞窟の中で大人しくしていたのだが。

「うーん……確かに、遅いかな？」

遅くてもいいけどね、という本音はしまっておいた。集めた木に灯した火は簡単なことでは消えない。エナが魔法を使ってつけた火だからだ。通常の火とは違う。

兵士科の人間が動いているのだから、すぐに見つかるだろう——そう思っていたが予想は外れたらしい。辺りは暗くなり始めている。「教官が指示を出しているだろうし、心配はいらないと思うけど」「荷物もありますし、野宿できないこともないですが……」

言葉を濁らせるエナに、シオンは「ああ」と合点する。

「お嬢様が心配？」

苦笑しながら問うと、エナは素直に頷く。これはなかなか罪な反応だ。

何故か、という理由は詳しく知らないが、エナの中でコーリアという存在はかなり絶対的らしい。それこそ神様かと言えるほどに。観察しているとエナは自分のことよりもコーリアのことを優先することが多々ある。

「……大丈夫だよ。それこそ、向こうには教官がいるから」

まるで感情のこもっていない言葉だな、とシオンは思った。正直なところ、シオンにしてみればコーリアなんてどうでもいい。目の前の少女さえ無事でいてくれるのなら。

「シオンさんに大丈夫と言われると、安心します。でも……巻き込

んでしまつてすみません。ちゃんと予定通りいつていればテントの中で眠れたのに」

しゅん、と落ち込むエナを見てシオンは微笑んだ。

「気にしないでいいよ。テントっていつでも野郎に囲まれて寝るわけだし。それを考えると寝心地悪くてもこの方がマシだよ」

「でも、毛布も一枚しかないですし」

シオンが目を覚ますまで使っていた唯一の毛布は、今エナが使っている。シオンが無理やり押しつけたのだ。エナはそれがいたたまれないのだろう。

「火もついてるから寒くないよ。男の俺より、女の子の方が身体冷やしちゃうないようにしないと」

ね？ と同意を求めるが、エナは困った顔のままだ。

――本当に、氣遣われることが苦手だなあ。

苦笑しながらそんなことを思う。こちらは優しくしたいのに、彼女は優しくすればするほど困った顔をする。

「やっぱり冷えてきましたし、二人で使いませんか？ 少し窮屈かもしれませんが」

そう言つてエナは毛布を持ち上げてシオンの傍まで近づいてくる。

――心臓が一回、大きく鳴った。

彼女に他意はない。純粹に寒さをしのぐと考えた結果だ。自分一人毛布を使うことに罪悪感を感じているからだ。けれどその提案は心臓に悪い。

「シオンさん？」

エナは首を傾げてシオンを見上げてくる。

一枚の毛布に一緒にくるまる？ 誰もいない、薄暗い洞窟の中で？ 信用されている、信頼されているにしてもそれはあんまりではないか。まるで男として意識されていないことがまざまざと分かる。

「……君さ」

ぼつりと呟くと、その声は洞窟の中に反響した。

シオンがエナの細い腕を掴む。力を入れれば折れてしまいそうな

ほどに細い。

「シオン、さん……？」

エナが小さく名を呼ぶ。その声が耳まで届くと、胸が熱くなった。

「警戒心が、なさすぎるでしょ」

掴んだ腕を引き寄せて、耳元で囁く。

びくん、とエナの身体が震えた。

「……………」

抱きしめて、髪を撫で、こめかみに口付けを落とそうと唇を寄せる。小さく囁いた言葉はエナに届いたのか届かなかったのか。シオンが苦笑した、その時だった。

「エナ——！！」

今にも泣きそうな、必死の呼び声が聞こえた。

ハッとエナは顔をあげて、洞窟から飛び出す。その背中がシオンにはまるで逃げているかのように見えた。

洞窟の外には、点々と灯りが見えた。ようやく兵士科の仲間が来てくれたのだろう。

「コーリア様——！」

声に応えるようにエナはコーリアの名を呼んだ。一つの灯りが大きく揺れた。

エナ、と呼ぶ声が徐々に近づいてきて、すぐに息を切らしたコーリアが姿を現した。その後ろからジェイドとザギも駆けつけてくる。

「エナエナエナ！」

コーリアはエナの姿を自分の目で確認した途端、駆け寄って小さなエナの身体を抱きしめた。まるで姉妹のようだ。

感動の再会をしている横をすり抜けて、ジェイドがシオンのもとへ来る。さらりと一瞥して、笑う。

「無事みたいだな」

「はい。どうにか」

謙遜ではなく素直に答えた。エナがいなければ今頃蛇の毒で寝込んでいただろうから、手放しに胸を張ることも出来ない。

傍らでザギが笛を取り出して吹いていた。高い音が山の中に響く。見つかった、の合図だろう。

「それじゃあ野営地まで移動するか。歩けるか？」

ジェイドが問うので、シオンは頷いた。それまで見越して今まで大人しくしていたのだから当然である。

「？ エナ？ どうかした？」

返事をしないエナを不思議に思ったのか、コーリアがエナの顔を覗き込む。しかしエナは黙り込んだままだ。

「顔が真っ赤だよ？ 熱でもある？」

コーリアの問いに、エナは「いえ」と短く答える。頬が赤いのは自分自身でもよくわかっていた。いつもよりもずっと熱い。

包み込まれた時の体温。そして。

『……………好きだよ』

優等生の狂想曲（5）

——言うつもりのなかった言葉だった。少なくとも、今はまだ。

やってしまったと今さら後悔しても遅い。

「……どうしたんだ」

しゃがみこんだまま動かなくなったシオンを見下ろして、ザギが
呟く。

気がつけば野営地についていた。とりあえずついてすぐにジェイドとネデイルに説教され、予定よりも遅くなりながらも就寝の準備をして、今にいたる。

「俺ってもう少し自制のできる人間だと思ってたんだよね」

苦笑しながらそう言っていると、ザギは顔色も変えずに「そうか」と答える。

「それはそれだけおまえに余裕がなかったんじゃないのか？」

素直なザギの言葉に、シオンも「そうだね」と笑う。あんな状況で冷静でいられるほど、大人になったつもりはない。けれど怯えさせるつもりも嫌われるつもりもなかったのは事実だ。

「これは、神様降格かなあ」

それはそれでいいかもしれない、なんて思う自分もいるのだから手に負えない。

いつそ自分の記憶にも残るようにキスまでやってしまえば良かったとも考えてしまう。惜しくも一回目と数えられる記憶は自分にはないから。

空を見上げればそこにはきらきらと星が輝いていた。シオンにはそれがまるで自分を嘲笑っているように見えて、ため息を零す以外に出来ることはなかった。

狭いテントの中六人雑魚寝の男子とは違い、女子は人数が少ないのだからゆとりがある。コーリアとエナは一つのテントを二人で使うという贅沢ぶりだ。すぐ隣には教官のテントがある。虫よけだろ
う。

「エナ？ 本当にどうしたの？」

心配そうに問いかけてくるコーリアにここまで居心地が悪くなるのは、おそらく人生で初めてだろう。

「なんでも……ないです」

「そんなふうに見えないから聞いているの。何か困ったことがあった
なら言って？ 悩んでいることがあるなら……やっぱり言って？」

ね？ とコーリアに諭されて、エナは黙り込んだ。

『……好きだよ』

耳元で聞こえた甘い声。

あれは、友情の類いの言葉ではなかった。それくらい、エナにも
分かる。分かってしまった。

困っている……といえばそうなるのかもしれない。悩んでいる、
わけではないと思う。

「——ごめんなさい、コーリア様」

考えた挙げ句出てきた言葉は謝罪だった。

「コーリア様に救われて、ここまで生かしてもらって、これからも
死ぬまでずっとコーリア様のために生きていこうと思っていたん
です」

それだけで良かった。コーリアの為、それだけがエナの生きる理
由だった。

だから、必要のない感情だった。

——恋、なんて。

まだ誰も目が覚めていないような早朝に目が覚めてしまった。シオンは狭いテントを抜け出して冷たい空気を吸う。

そもそもよく眠れなかった。意外にも繊細な神経をしていたんだな、と自分でも新たに知る自分の一面に笑う。

うーん、と伸びをしていると、背後で草を踏む音がした。足音が軽い。

まさか、と思ってすぐに振り向けなかった。嫌われただろうし、怖がらせただろう。近づいてくるわけがない。

「……シオンさん」

くん、と上着の裾をひっぱられてやっと振り返ることが出来た。小さな彼女は俯いているせいで、顔が見れない。

「どう、したの。こんな朝早く」

「えと、その、目が覚めて外に出たら、シオンさんがいたので」
それにしてもタイミングが良かった気がするけど。いつもなら言っってしまう追撃も、今日だけは飲み込んだ。

「……………」

「……………」

妙な状態のまま、二人して黙り込んでしまった。エナはまだ上着の裾を掴んだままだ。そんなことしなくても逃げないのに、とシオンは思った。むしろ逃げたいのは君の方じゃないの？

近くのテントの中がごそごそと動き始めた。そろそろ他の生徒も起きるだろう。

——この状況を見られたらむかつくなあ。

羞恥というよりも、彼女を独占したいという下心がかなり含まれている。

「ちよつと。移動しよう」

エナの手をとって林の中に隠れるように入って行く。そう遠くまで行かなければ大丈夫だろう。

嫌がられるだろうか、というシオンの不安をよそに、エナは大人しくついてきた。相変わらず俯いたままだが。

「……まあ、もう少しならこうしてても平気だと思うよ。まだ起床時刻まで時間があるし——」

「私」

その場しのぎのシオンの言葉を遮るように、エナが口を開いた。

「……私、コーリア様の為だけに生きてきたんです。これからも、生きていくつもりです」

「それは、知ってるよ」

君にとつてお嬢様がどれだけ大切な存在なのかなんて、今さらでしよう。そう思っても口には出来なかった。嫌でも頭の中で自分とコーリアを天秤にかけてしまう。エナはどちらをとるだろうか、なんて。

「だから、要らなかつたんです。他の特別な感情なんてそれは。」

「……俺は神様降格ってことなのかな」

覚悟してたけどね、と笑うとエナはやつと顔をあげた。

「違います。コーリア様とか関係なくて、神様とかもどうでも良くて、要らなかつたのにいつの間にかあつたから、だから戸惑つてて」
「そこまで言われれば、賢いシオンには分かる。でも助け舟を出さなかつたのは、その先の言葉を聞きたかつたからだ。」

エナはシオンを見上げたまま、言葉を詰まらせた。

普段からあまり動揺を見せない彼女には珍しい。

「……戸惑つてて？」

シオンは待ち切れずに先を促すと、エナは恥ずかしそうに呟く。

「……もう、『聞こえてる』でしょう？」

お互いにテレパシーが伝わりやすいということは、少し前から知

つてることだ。実際先程からエナの言いたい言葉は脳内に伝わって来ている。余裕がないからこそ制御できないのだろう。

「直接聞きたいな、と思って」

「ずるいです」

「俺はいくらでも言っただけよ？」

する、と頬に触れるとエナは困ったように口籠もる。

シオンが静かに待っていると、エナは小さな声でようやく呟いた。

「あなたが、好きです」

シオンは満足したように微笑んで。

「俺も、君が好きだよ」

エナの小さな身体を優しく抱きしめた。

『ごめんなさい、コーリア様』

『コーリア様に救われて、ここまで生かしてもらって、これから死ぬまでずっとコーリア様のために生きていこうと思っていたんです』

でも。

『私、すきなひとができました』

優等生の狂想曲（5）（後書き）

これにてシオン主人公のお話はおしまいです。
苦勞というか苦悩していた彼もこれで少しは報われたんじゃないで
しょうか。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1741g/>

グラン・エルデの恋歌

2011年10月4日06時17分発行